
けいおん！ ～黒の奏でる旋律～

koreel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ ～黒の奏でる旋律～

【Nコード】

N1414Y

【作者名】

korel

【あらすじ】

桜ヶ丘。ここに中二から一人暮らしの少年が居た。両親は海外在住。

家は裕福だったものの、心は乏しかった少年こと斉藤 黒一。

彼に友達はいなく一匹狼を通してきた。唯一、信用できたのはギタ―と

弓だった・・・。この物語は、そんな彼を大きく変えた3年間であり生涯の

宝物でもある3年間を書き綴ったものである。

※更新は不定期気味、作者に音楽の知識があまりない、国語力不足・
・・e t c

などの不安要素満載の小説です。それでも、よろしければ立ち寄
ってみ

てください。

プロローグ・黒の3年間の始まり（前書き）

初めまして、koreelです。

小説の投稿は初めてではありませんが、まだまだ未熟者です。

皆さんの作品も読んで僕も向上していこうと思っています。

プロローグ、スタートです。

プロローグ・黒の3年間の始まり

一黒一、悪いが俺達はアメリカに移住することになった。

だが、お前は日本にいてほしい。

アメリカ《向こう》でお前を仕事に巻き込みたくない。

分かってくれ黒一……………

・

あれから2年……。まあ、別に悲しくもなんともないけどな。

どーせ、日本にいても構ってくれないんだろう？

昔から……。いつもそうだ。俺はいつも一人。

トモダチとか、カゾクとかほんとにどうでもいい。

でも、感謝してることだってあるんだぜ？ギターと弓だ。

親父からはギター、母親からは弓……。どんだけ不釣り合いだよ……。

幼少の頃の家と比べて随分とちっぽけな家だけど2年も経つともはや、

俺の実家のようにも思えてきた……。

今まで一匹狼で中学校生活は通してきた。一応、真面目に勉強した。けど・・・高校になったら、何かを変えたくなってきた。

心の蟠りも何もかも無くして新しい自分になりたいくなってきた・・・。

親父に貰ったPRSに母親に貰った竹弓。

今でも大事に使ってる。弓道場にも時々、通ってる。

＼桜ヶ丘高校・受験結果の掲示板前＼

今年から女子高だったのが共学になったのだ。

俺としてはラッキーだ。家近いし・・・進学率そこそこだし・・・。

結果は当然の如く合格だろう。ちゃんと勉強したしな。

黒一「608・・・608・・・と・・・。お、あったあった。」

周りでも、ぴよんぴよん飛び跳ねてる奴がいたり・・・落胆している奴も

いたり・・・掲示板見るのを怖がっている奴など様々だ。

黒一「ま、確認済んだし帰るか。祝いつてことで外食でいいか。」

俺が帰ろうとすると、後ろから突然声を掛けられた。

唯「あの、すいません！け、結果発表、一緒に見てくれませんか！？」

振り返ると、若干癖毛気味の少女がいた。

黒一「・・・は？何だよ・・・。」 唯「じ、実は・・・。」

唯「一緒に来てくれるはずの友達が風邪で来れなくなって・・・

妹も用事で来れなくなっちゃったんです・・・。」

いや、そんな事情知らねエーよ！だが、その少女の顔がとても悲しそう

だったし断る理由や大したことでもないので一応承諾する。

黒一「分かった・・・。一緒に見てやるからそんな顔すんなって。」

唯「ほ、ほんとですか!？」 黒一「ああ。ほんとだ。」

すると、さっきの悲しそうな顔が嘘のように消えてとびっきりの笑顔に

なった。いや、さっきの絶対演技だろ!

黒一「ほら、せーのでいくからな。」 唯&黒「「せーの!」」

これで、受かってなかったら・・・!? 一瞬、ドキツとする。

唯「あ、あった! やったー!!! あ、そうだ。自己紹介遅れました!

私、平沢 唯です。唯って呼んでください!」

唯って……。いきなり、名前で呼ぶのかよ……。お断りだ……。

黒一「俺は、斉藤 黒一だ。」 唯「黒君だね!!!」

・・・は? 本日、二度目だ。しかも、タメ口に切り替わったし……

。

唯「黒一君だから、黒君だね!!!」 黒一「いや、斉藤にしろ・・・」

黒一「いや、だめだ。斉藤にしろ!」 唯「黒君だよー!!!」

とか、下らん口論をしていると短めのポニーテールが現れた。

憂「お姉ちゃん!」 唯「あ、憂だ!」 黒一「・・・妹か?」

憂「用事早く済んだんだ。お姉ちゃん、この人は?」

唯「あ、紹介するね。掲示板一緒に見てくれた黒君だよ!」

憂「お姉ちゃんがお世話になりました。黒さん。」

黒一「いや、違うだろ！斉藤 黒一だ。（出来た妹だな・・・。）」

憂「あ、失礼しました。黒一さん。お姉ちゃん、あだ名付けるのが好き

なんです！それと、決めたあだ名は絶対忘れません！」

まったくをもって迷惑な性格だな・・・。妹、苦勞してるな。

唯「黒君、メアド交換しよ！黒一「・・・ああ。」憂「私も！」

メアド送信&受信完了。・・・あれ、何か違うね？

いつもの俺じゃない。こんなに他人と群れたりしないはず・・・。

俺、高校生になってやっぱり変わったのかな？

憂「あのー、よろしければ黒一さん達も一緒に夕飯どうですか？

といっても、レストランなんですけど・・・。」

唯「とっても、おいしいんだよ！一押しなんだよ！」

うーん、どうするか。でも、何かアレだな。

よくよく考えてみたら俺、一人十男じゃん。気まずい……。

黒一「……遠慮しとく。家族でごゆつくり……唯「ええええ」
「……」」

やめてほしいわその顔《演技》周りの視線が痛いわ！

憂「お姉ちゃん、無理言ったらだめよ。」……逆効果……。

妹は必死に姉を宥めている。余計、断り辛い……。

黒一「わ、わかった。目線痛いから、そんな顔すんな！

それと俺、家族いないから。」

一瞬、周りが「へっ？」という空気になる。当然だろうな。

憂「なんか、すいません……。」 黒一「別居してるだけだ。」

黒一「仕事の関係だよ。中二の頃から一人だ。」

そんな空気を壊したのが天然娘の平沢 唯だった。

唯「黒君は寂しくないの？」 黒一「まったく。じゃあな。」

無性にこの話が癪に障ったのでとりあえず家に帰った。

く平沢家一押しのレストランく

平沢・父「黒一君も大変だったんだね。」 黒一「は、はあ・・・。」

黒一「でも、幼少の頃からそんな感じだったし慣れてましたから。」

憂「あ、お姉ちゃん！口にソースが・・・。」 唯「え、どこどこ？」

憂「動かないでお姉ちゃん！」 唯「ありがと、憂♪」

シスコンオーラが出てるような気がする・・・ここ妹・・・。

それにしても他人とこんなに喋ったのは何年ぶりだろう？

ていうか、生まれて初めてだろう。今まで一人だったから。

でも、悪い気はしなかった。むしろ充実した一日だった。

一俺、新しい自分になれるかもしれない！

ブローグ・黒の3年間の始まり（後書き）

割と、執筆は捗りました。ちなみに作者は弓道部所属です。

ですが、竹弓など僕には到底扱えませんww

黒一君のギターですが、ポール・リード・スミスPRSにしました。

結構、高級のやつにしました。

レスポールとストラトの長所をいいとこ取りしたやつですよ？

よろしければ感想まっています。

#1 黒の奏でる旋律（前書き）

いきなり、タイトルをサブタイトルにしちゃいました。

ていうか、サーバーに接続できなくて困ってましたWW

負担がだいぶ大きくなってたみたいですネ。

#1スタートです

#1 黒の奏でる旋律

（1—1の教室・放課後）

入学して2週間が過ぎた。クラブは弓道部検討中……。っーか男子生徒少ないなー。

俺を含めても、1組は10人少々しかいねエーぞ！まあ、仕方ないか。

高校生になって初めて友達もできた。下原 亮という俺と同じくらいの体格の奴。

和「唯、まだ部活に入ってないの？」 唯「何か、しなくちゃいけないとは思ってるんだけど……。」

和「はぁ……こうやってニートが出来上がっていくのね……。」
黒一「……オーバーじゃないか？」

もしかすると、唯にあえて焦らせるようなことを言ってやる気をださせようとしているのか？

それとも、ただのボケなのか？結構心に刺さるな……。

唯「クロ君は部活決めたの？」 黒一「俺は、弓道部に入るぞ。」
唯「クロ君……。」

何その、裏切ったなみたいな感じの視線は……。

（後日）

黒一「下原、お前も弓道部だよな？」 亮「ああ。お前も入るんだろ？」 黒一「今日、入部する。」

すると、平沢が割って入ってきた。何やら手に部活申請用紙が握られていた。

唯「とりあえず、軽音部ってところに入部してみました！」 黒一「お前、ギターとか弾けんの？」

そりゃ、意外だな。音楽とか運動とか無縁そうな奴なのに。

唯「ええっ！私、ギターなんて弾けないよー！」 亮「どんなクラブだと思ってたんだ……？」

唯「へっ？ いや、軽い音楽というくらいだから口笛とかやるクラブかと……。」

……口笛とか、どんだけやる気のないクラブだよ。てか、口笛極めてどうすんだよ……。

亮「平沢……お前、すごいな……。」 唯「えへへ……ありがと亮君♪」 黒一「……。」

やっぱ、平沢はすげエよ……。色んな意味で……。

唯「はっ！ お願い、クロ君。退部しにいくのつきあってくれない？ 一人じゃちよつと……。」

確かに、コイツ一人じゃ退部できるか心配すぎる……。軽音部の人も迷惑だろう。

軽音部か……。あったんだな、そんなクラブ。

黒一「俺も、弓道部に入部してエから手早く済ませるぞ。」 唯「ありがと、クロ君！」

〽音楽室………に、たどりつけない〽

黒一「おいコラ！さっさと、行くぞ！！！」 唯「あゝあ、クロ君
引っ張らないでえゝ。」

オカルト研とか妖怪クラブとか同じでいいだろ……。

〽音楽室前〽

沢子「音楽室なら、この上よ。」 黒一「あ、はい。」 唯「はあゝ……。」

会談を上って、ようやく音楽室に着いた。ん？天然が震えてる？

律「あなたが、平沢 唯さん？」 唯「はあゝびっくりしたあゝ。
あ、はい。そうです。」

律「はあゝ♪ムギ、お茶の準備だ！いやあゝ、入部希望者が二人
も来てくれるなんて♪」

え……二人ってことは……俺も！?!?!?!

黒一「いや、俺は・・・律「さあ、入った入った!!!」おい・・・」

（音楽室）

秋山「軽音部へようこそ!」 紬「お待ちしてました♪」 黒一「はあ・・・」

紬「さあ、召し上がって♪」 目の前には高級そうな紅茶とお菓子が置いてある。

黒一「俺は、甘いものが苦手なんだが・・・」 唯「なら、私が・・・」

完全に、本来の目的を忘れてるよこの人。さすがは天然・・・

黒一「おい、カチューシャ。俺は、入部しにきたわけじゃないから。

コイツも実はギター弾けないから退部しにきたんだ。」

律「えええ！！！そうなのか！？待って、あと1人入部しないと廃部になっちゃうんだよ！！！！」

黒一「知らね。」 律「そんな、冷たいこといわずにせめて演奏だけでも聴いてってよ！」

黒一「平沢、いいか？」 唯「うん！」 黒一「だ、そうだ。聴かせてくれ。」

翼をくださいのロックverか。にしても、なんだろうこの感覚は・・・新鮮だ。

今まではPRSだけで旋律を奏でてきたが、音が合わさるとこんなにも新鮮なのか・・・。

演奏自体は全然うまくない。けど、この世界はとても広そうだ。

弓道は最寄の弓道場にいけばいいのだ。なら、軽音部に入ろう！

唯&黒「あんまり、うまくないですね（うまくないな）！」 律「ばっさりだー！」

唯「でも、私、この部に入部します！軽音部に！」 黒一「俺もだ。」

律&滯&紬「やったー！ー♪♪♪」 黒一「俺は、ギター弾けるぞ。」 律「おお、そうか！」

唯「すごい、クロ君！ギター弾けるんだ！」 黒一「小4の時からだ。」

紬「あれ？クロ君って、あなたもしかして斉藤 黒一君？」 黒一「ああ。そうだが？」

紬「やっぱり♪ほら、黒一君の両親と私の両親が仲がいいから・・・。幼い頃に一度会ってたのよ。」

あゝあ、何か親父が言ってたな。琴吹家とは仲がいいとかで、紬という名も聞き覚えがある。

黒一「確かに、そんな記憶がある。8歳くらいだったか？」 琴吹
「うん♪」

秋山「へえ、ムギと斉藤君は知り合いだったんだな。」 律「て
ことは・・・・・・・・・・・・・・・・」

ん？何だ・・・・・・・・・・とても、嫌な予感がするぞ・・・・・・・・
・・・・。

律「黒一お坊ちゃまってこと！？ぷぷぷぷ・・・・・・・・・・い
てっ！何すんだよ、黒一！」

俺が、一発手刀をカチューシャに決めたのだ。お坊ちゃま・・・・？
ふざけんな！

黒一「お坊ちゃまは禁句だからな！？」 律「わーりやしたよ。」
反省してんのか？

〳後日・教室〳

和「へえ、唯って軽音部に入ったんだ。」 唯「私、ギター弾

くんだ。」

黒一「俺、やっぱり、軽音部に入ることにしたわ。」 亮「ええ！
？弓道部は、入らないの！？！？」

（音楽室・放課後）

唯「うーん、おいしーい。」 黒一「おい、練習・・・いや、平沢
ギターは？」 唯「へっ？」

律「じゃあ、今週の日曜にギター見に行くか！」 黒一「それがい
いな。」

唯「ねえ、クロ君のギター見せて！」 黒一「ああ。これだ。」
滯「PRS!？」

滯「へえ、凄くいいギター持ってるんだな！」 黒一「あ、ああ。
秋山・・・近い・・・。」

滯「ご、ごめん／＼／＼」 紬「滯ちゃん・・・黒一君・・・。」
唯「ムギちゃん・・・？」

律「なあ、クロ！なんか、弾いてみてくれよ！」 紬「私も黒一君
のギター聴きたい！」

黒一「そのカチューシャと天然が俺の事をあだ名で呼ばなかった
らな。」

律「誰が、カチューシャだ！！！」 唯「ええええ！クロ君だよ
〜！！！！」

俺はブーブー言うカチューシャと天然を無視してPRSをアンプに
繋ぐ。

そして、適当に曲を決めてそれを自分らしく奏でる。自分らしく・
・・・。

紬「黒一君すごい♪何か・・・黒一君らしい感じだった。」 唯
「クロ君、私の先生になって！」

澤「さすがは、斉藤・・・・・・・・黒一・・・・・・・・だな／＼」
なぜ、
無理してまで名前で呼んだ・・・・。

とにかくにも、俺は軽音部に入部したんだ・・・・。

#1 黒の奏でる旋律（後書き）

進度的には、廃部と楽器の初めの方までですかね。

ちよくちよくオリジナルも入れる予定。次話はオリジナルかな？

感想・アドバイス、まっています。

#2 黒十天然の旋律（前書き）

初めの方はオリジナルの話で、その後はアニメ扱いです。

オリジナルというよりは、黒一の小話みたいなものですが・・・。

#2スタートです。

#2 黒十天然の旋律

く黒一宅く

黒一・父『高校合格おめでとう、黒一!』 黒一「今更、おせーだろ。」

黒一・父『・・・確かに、お前は生活能力もあるしスポーツや勉強もできる。』

だから、中二の時からお前をほっといたわけじゃない。』

黒一「じゃあ何故、俺を置いていった?」 黒一・父『それは、お前の・・・「嘘だ!」

黒一「言い訳せずに、はっきり言えよ!仕事の方が大事だったって。」 黒一・父『・・・。。』

黒一・父『そのことなんだが・・・また、今まで通りに戻らないか・・・?』 黒一「は?」

黒一・父『俺も反省している……。だから、また一緒に……。』
ほんとに今更な話だな。」

黒一「昔の俺なら考えたかもしれないな。だが、俺も高校になって
変わったんだ。」

友達もできたし、二度と屋敷には戻りたくない。

でも、親父達に育てられたことは忘れてないし今までも感謝
を忘れたことはない。

だからこそ、絶縁なんて考えてもないし恨んでもない。むしろ、感謝してる。

この環境におかれたからこそ、今の自分とこれからに期待できるようになった。

屋敷に戻ることもなくて、もう二度とないだろう。」

黒一・父『……随分と成長して、お前も自律したんだな……。すまなかった。

最後に黒一。ありがとう……。プツッ！』

電話が切られた。結構、一方的な切り方だったがな。根は腐っていないようだ。

黒一「たくっ！ありがとうを言うくらいなら、いっぺんでも会いにこいつっの！！！」

俺は、親父達がいなかったら今の幸せは掴めなかっただろうな……

一人ぼっちの時には得られなかった期待と色んな夢を手に入れられた。

ギターだって同じようなもんだろう。バンドを組まなければ手に入らない 音 がある。

黒一「そして、今日がそのバンドスタートの日か……。よっしゃ！！！」

く待ち合わせの商店街く

黒一「遅せエーな……。」「 律「お、来た来た！」
唯「お〜い♪」

と、思いきや、人にぶつかったり犬をあやしたり・・・・・・・・・・。
まじ、何なんだよ・・・・。

《あと、数メートルなのにたどりつけない・・・・・・・・・・。》

唯「お母さんに無理言って、5万円前借しちゃった♪」 黒一「
そんだけありゃ十分だろ。」

その後、天然に寄り道に付き合わされたり最後の喫茶店でようやく
本末転倒している事に気づく・・・・。

♪10GIA♪

滯「女の子なら、ネックが細いやつがいいぞ。」 唯「あ、このギ
ターかわいい♪」

黒一「まったく聞いてねえな・・・・」 「それ、25万するぞ。」
唯「さすがに手が出せないや・・・・。」

黒一「向こうに安いやつがあるぞ。ストラトとかテレキャス系とか

色々・・・。」

黒一（眼無視・・・動く気配なしだな・・・。） 紬「そのギターが欲しいの？」 唯「うん・・・。」

漣「私も、あのベースが欲しかった時こんな感じだったな。」

回想からすると、何か秋山のは違う気がする・・・。。。

律「私も、あのドラム買うために値切って値切って・・・。。。」

店員さんの涙が眼に浮かぶ・・・。。。。漣「店員さん、泣いてたぞ。」やっぱしな。

紬「あの、値切るって？」 律「欲しい物を手に入れるために負けてもらうことさ！」

そこはドヤ顔するところなのか？

紬「何か、懂れます♪」 黒一「いや、懂れないほうがいい……」

律「じゃあ、みんなでバイトするか！」 漣「バイトってどんなのするんだろ……」

（音楽室）

律「うーん、じゃ、ティッシュ配りとか？」 漣「……」
・無理そう……」

紬「ファーストフードとかは？」 漣「それも、無理そう……」
律「じゃあ、これは？」

唯「交通量調査のバイト？」 黒一「確かに、これなら大丈夫そうだな。日給もそこそこだし。」

唯「あ、野鳥の会だね！」 漣「うん、これなら大丈夫！」

こうして、何のバイトするかは決まった。にしても、職業病になり
そうなバイトだな・・・。

（後日・教室）

黒一「ってことだから、バイト付き合え。頼む、下原！強制で水口
も！」

水口 慶「俺、強制かよ！！！」 黒一「お前、どうせ暇人だろ？」
慶「誰が暇人だ！」

亮「なら、弓道の大会。欠席の奴の分も出てくんね？」 黒一「俺
がか？」 亮「そうだ。」

亮「ウチの部も人数あんま多くねえんだよ。3年生もいねえし。去
年から出来た部なんだよ。」

人数ギリギリだから、お前が来てくれれば丁度なんだよ。再来
週の話だが。」

黒一「部外者だぞ俺。」 亮「じゃあ、大会まで両立すればいい。」
黒一「よし、分かった。」

慶「俺は、じゃあ……黒一「お前は、じゃあもくそもねエ
だろ！強制だ。」

慶「ふざけんな！道行く美女をカウントするなら分かるが、車なん
かカウントしたくねエ！」

黒一「スケベ・変態・痴漢、死ね。それを償うために働け。」 亮
「めっちゃくちゃだな……」

慶「俺はパスだ！……黒一「慶音部の美女を一日中、拝め
るぞ。」是非、やらせてください。」

コイツ、冗談で乗ってきやがった……。まあ、単純な奴のほうが
扱いやすくていいのだが……。

（放課後・音楽室）

黒一「というわけで、鴨を二羽連れてきたぞ。」 亮「おい・・・。」
慶「水口 慶です！」

黒一「あ、コイツは・・・慶「あー、何でもないです！」チ
イ！・・・。」

唯「クロ君、亮君、慶君！私のために、ありがとう！」 慶「いえ
いえ^^」

（バイト当日・とある道路前）

慶「うお、お、お、イイイイ！！！！！！！何で、俺だけむさいおっ
さんなんだよ！！！！」

ふふっ！調子に乗るからだ・・・。無論、俺は亮とペアだ。ざまー
ww

亮「・・・おい、お前てきとー過ぎだろ。」 黒一「こんなもん、
てきとーにやってなんぼだ。」

俺からすると、てきとーにやってもバレねエだろうし金さえ入ればこっちのものだ。

こんな感じで一日目はやり過ごした。そして、二日目で問題発生！変態が逃亡しかけた。

が、「男が約束破るのは恥ずかしいぞ！」とか言ったらすぐ戻ってきた。

そして、二日目も終了。水口は病的にやつれたような顔してたが・・・。

「はい、おつかれさまでした。」 『ありがとうございました!』

日給80000×2×7+50000〓合計…162000円 まだ足りんな。

紬「まだまだ、足りないわね・・・。」 濤「あと何回かバイトするか・・・。」 唯「あの・・・。」

唯「やっぱり、これはみんな自分のために使って!」 黒一「いいのか?」 唯「うん・・・。」

慶「けど、それじゃ欲しいギター買えないよ？」 黒一「お前の分は俺に貢げ。」 慶「なにっ！」

唯「早く、皆と練習したいから……。だから、もう一度楽器店に付き合ってくれる？」

こうして、慶音部+@によるバイトでギター購入作戦終了。。。

＼10GIA＼

黒一「ムスタングとかどうだ？一応、初心者向けのやつだぞ。って・
・おい・」

結局、あのレスポールに行き着くのかよッ！素直に金受け取っ
よッ！

紬「あ……。ねえ、黒一君。ちょっと協力してもらってもいい？」

黒一「……。まさか……。」

＼レジの前＼

紬「あの……。」 店員1「はい？」 紬&黒「「値切ってもらってもいいですか？」」

やべエ……地味につつか、普通に恥ずかしい……。店員も「はあ？」とか言ってるし……。

でも、大丈夫だ。なにせ、ここは親父がよくしてた店だからな。グッジョブ親父！

店員1「ん……？あ、あなたは、社長の娘さんに斉藤様のところの黒一さん！

カチャ カチャ カチャ……こんなもんで……紬「もう一声♪」 黒一「そこを何とか。」

店員は泣きながら、電卓をもう一度打ち直して5万円にしてくれた。さすがに、鬼畜だったか……？

紬「そのギター、5万円で売ってくれるって！」 唯「どうやって、負けてもらったの!？」

紬「実は、ウチの系列のお店で……。」 黒一「親父が頻繁に使ってた店だったからな……。」

唯「ありがとう、ムギちゃんにクロ君！必ず返すから！！」↑絶対、嘘だろ……。

こうして、平沢は何とか念願のレスポールが手に入ったとき。めでたし、めでたし。。。

（平沢家・side唯）

遂に、あのギターが手に入ったんだ！これからは、いっぱい練習しなきゃね！ふんすっ！

唯「グユイイイン！！！！うわあ、ミュージシャンみたいでカッコいい！！」

憂「お姉ちゃん、うるさい……。」「唯「あ、ごめん憂……。」「
つい、興奮しちゃって……。」「

だって、凄く欲しかったギターが手に入ったんだよ！名前は、何てゆうんだっけ？

一日も早く、クロ君に追いつかなきゃ！色んなこと教えてもらわな

いとね！

〽後日・音楽室〽

『おおおお〜！！！！』 黒一「ギター持つとそれっぽいな。」
律「似合ってるぞ、唯！」

唯「えへへ・・・ねえ、ライブみたいな音出すにはどうするんだっけ？」 黒一「アンプに繋ぐんだ。」

平沢は、レスポールをアンプに繋いで弦を適当に弾いた。

ギュイイイン！！！！ それは、軽音部というなのライブの始まりの音に聞こえた。

潯「やっとスタートだな。私達の軽音部・・・。」 黒一「ああ。そうだな。」

律「夢は、武道館ライブ！！！！・・・卒業までに！」 黒一「無理だ。」 律「おい！」

俺らがグダグダ喋っていると、平沢が・・・「アンプで音を出すのはもう少し先だね・・・。」

黒一「ば、馬鹿、ボリューム下げろ!!!!!!」
唯「へっ!・・・ギ
ーーーーーッ!!!!!!」

俺は、とっさに耳を塞いだが平沢は至近距離で直に聴いたのでグロッキーだ。

滯「アンプから抜く前に、ボリューム下げないとなっっちゃうんだよ・・・。」

唯「それを先に言って・・・・・・・・・・。」
黒一「・・・・・・・・つぶねェー。」
唯「クロ君ずるい・・・・・・・・。」

相変わらずのグダグダさ……。けど、ようやくスタートなんだよな・・・俺らのバンド。

（弓道場）

完全に忘却していた・・・・・・・・。弓道の大会に出るって言ったんだっけ？

約束通り、大会には出なければならない。弓道暦は中一から始めたので4年目だ。

正直、だるいが自分の腕を試すいい機会でもある。それに、大会も初体験だからな。

黒一「皆中が二連続か。だいぶ、調子いいな。個人技だけでも入賞したいところだが・・・。」

俺の使ってる竹弓は上級者向けのやつだ。扱いこそ難しいが、使い手に馴染むのだ。

他に、豆知識を言っていると弓を引く際につけるかけ《・・・》というグロ―ブがあるのだが、

自分の癖が全てかけ《・・・》に移るのでいくら上級者でもかけ《・・・》が変われば初心者同然になるのだ。

だから代わりのないもの・・・つまり、かけ《・・・》がえのないもの。語源はかけ《・・・》から来ている。

#2 黒十天然の旋律（後書き）

今回は、ボケ専用モブキャラの水口 慶君を追加しました。

基本的には、変態&アホ&ボケのやられキャラです。

感想・アドバイス、まっています。

#3 黒と中間テスト（前書き）

言い忘れてましたが、僕の学校は振り休などで5連休です。

#3 スタートです。

#3 黒と中間テスト

↓下校中↓

部活も終わって下校中の俺。今日は、天然にコードを色々教えてやった。

真似をすると、アイツ指が何回もつたっけ？指のストレッチも教えてやった。

ちになみに、弓道の大会の話だが個人技は優勝できた。個人技はね・
・・・。

団体の方はギリギリ入賞できなかったな。先輩達は落胆していた。

個人技の試合は、最終的には命中率で決まる。俺は、ほぼ真ん中の中させた。

表彰状も貰ったが、先輩達や亮を差し置いてというのは何か気まずい・・・。

黒一「そういや、中間テスト近かったよな。だるリィが、勉強しないわけにもな・・・。

はア〜。・・・。平沢って、勉強してるのか・
・・・。？」

何となく、予感させるように平沢の名前が浮かんた。・・・何も、起きないよな・・・？

（試験当日）

黒一（出そうなところをかなり絞って勉強したからな。おっ！この問題もやったな。）

カリカリカリカリ・・・。まあ、これくらい解けて妥当なんじゃないか？

side 亮

亮（だいぶ、ノートも2・3回書き直したからな。100点狙えるんじゃないか？）

カリカリカリカリカリ。よし、この調子でいけば大丈夫そうだな。

side 慶

慶（やベェ・・・。テスト勉強したんだけどな・・・。追試確定だ

な
●
●
●
●
●
●
●
●
○
)

・ ・ ・ ・ ・ 。 親への言い訳と追

試対策のサポーターを考えねば ・ ・ ・ ・ ・ 。

（数日後の音楽室）

黒一「何とか、テスト終わったな。」

紬「高校になって難しくな
ったわね。」

澪「だな。」

琴吹はあんなこと言ってるが、余裕そうだな。追加、秋山もだ。

黒一「おい、アイツは色んな意味で終わってないか……？」
唯「あはは……。」

おいおい、生氣すら感じられないぞ……。追試は確定な雰囲気だな。

唯「クラスで2人だけ……追試だそうです……（12点）。」
黒一「予感の中だな……。」

紬「ま、まあ、今回は勉強の仕方がまずかっただけよ……。」
律「そ、そうだぜ！」

唯「勉強してなかった。」 黒一「論外だな。」 漣「ダイレクトに言うな……。」

唯「でもね、コードいっぱい弾けるようになりました。」 律「その集中力を少しは勉強に……。」

唯「ムッ！そういう、クロ君達は何点だったの？」 律&黒「私（俺）か？」

俺は95点。田井中は89点だった。お、平沢が萎えてる……。

唯「こんなの、りっちゃんのキャラじゃない……。クロ君……信じてたのに……。」

何を期待してんだよ、この天然が……。

律「なあ、クロ？「ああ？」お前、勉強できたんだな……。」「る

せエ！」

〱後日・音楽室〱

唯「んゝ、ようかんおいしいゝ♪あ、追試の人は合格点取るまで部活動禁止だって。」

おし、そうか。部活動禁止か……。……………

『ええっ!?!?!?!?』 漣「結構厳しいな。』 黒一「そんなことだろうと思った……。」

律「じゃあ、ここに居るのもまずいんじゃ……。」 唯「大丈夫だよ。お菓子食べてるだけだし。」

黒一「今日も、一段と天然が激しいな……。」 紬「でもそれって、まずいんじゃ……。」

漣「そうだぞ唯。このクラブ自体無くなっちゃうかもしれないんだ

ぞ！」 黒一「俺、忘れんな。」

漣「あ、つい・・・ごめん・・・。」 黒一「大丈夫だ。お前がいなくても支障はない。」 唯「ひどい！」

俺って、そんなに存在感なかったのかよ・・・。いや、周りの面子が個性的すぎるだけだろ・・・。

唯「でも、私皆と練習したい！だから、頑張る。」 黒一「じゃあ、精々頑張ってくれ・・・ッ！」

秋山に殴られた。さすがに、人事すぎたか？冗談のつもりだったんだが・・・。

漣「人事じゃないんだぞ黒一！」 黒一（いや、本当に人事なんだが・・・。）

でも、平沢って頑張るとか言っときながら勉強しないタイプの人間なんじゃ・・・？

いかん・・・また、予感が・・・。まさかな。さすがに、常人なら焦るだろ普通。

く追試まであと6日く

黒一「おい、お前ら……。菓子ばっか食ってないで練習もしろよ・
・・。」

律「だって、唯がないと張り合いがないんだもん。」 漣「そ
の割りに、よく食うな。」

いや、そういう問題でもないと思うんだが秋山さんよ・
・・。

く追試まであと2日く

漣「ちゃんと、勉強してるよね・
・・唯・
・・。」 律「だいじょ
う・
・・心配になってきた・
・・。」

俺も、アイツがだらけてる姿が目には浮かぶぞ・
・・。

紬「そうだわ！今晚、励ましのメールを送ってみるのはどうかしら
？」 漣「いいな、それ！」

俺が、励ましのメールを・・・？このまま、まともに送ったらツンデレじゃないか・・・。

よし、捻くれていて尚且つアイツがやる気を出すメールを思いついた。

＼その晩・side唯＼

どうしよう・・・追試まで後二日なのに勉強全然できていません・・・。

ピピピピピピ！　　どうやら、メールが着たみたいです。

唯「あ、滞ちゃんからだ♪ありがと♪あ、ムギちゃん！お菓子かあ♪よし、頑張ろう！

あ、りっちゃんからだ！ん・・・？ふふふっ♪クロ君からも着てる！」

黒一『このままだと、リードギターは俺になるな。安心しろ。お前が居なくても廃部にはならん。

だから、緊張しないでいいぞ。――END――』

唯「ひ、ひどいよ、クロ君！・・・・・・・・ひつく！グズン！・・・・。」

〽次の日・音楽室（追試まで後一日）〽

唯「漣ちゃん助けて！全然、勉強できなかった！」　漣「ええっ！勉強したんじゃないの・・・・？」

黒一「予感、またまた的中・・・・。」　律「何か言ったかクロ？」

黒一「いや何でも。」

唯「だって・・・・クロ君・・・・が酷い・・・・メール・・・・送ってくるから・・・・ヒック！グズン！・・・・。」

あ、やっちまった。何か、全員コッチがん見してくるんですけど・・・・・・。

漣「唯、ちよつとメール見せてみる。・・・・・・・・・・くろくろくろいっつー！！！！！」

黒一「・・・いや、あれは俺なりのエールだ。っと、あぶねェ！」

律&紬「お見事!!!!」

俺は、振り下ろされた拳を手で受け止めた。もう、同じ手はきかん。

漣「にしても、言い方ってもんがあるだろ！よし！特訓しよう！」「
そうか、頑張ってくれ。」

漣「お前は強制だぞ黒一！お前のせいでもあるんだからな！」「いや、
モラルとか色々あるだろ!？」

つか、俺があんなメール送らなくてもあんなにはならなかったと
思うぞ？

だが、断りきれない・・・。どうするか・・・。「黒一、ちよつと
いいか？」ん・・・亮・・・？

亮「コイツの勉強みてやってくんね？」となりに居る慶^{パシリ}を指差し
た。

黒一「全力でお断りだ。俺は、平沢の勉強をみてやらねばならん。」
慶「……………」

水口は、遂におかしくなったのか・・・狂ったように笑いながら音楽室を後にした。

アイツ、前に勉強教えたとき全然理解しようとしてなかったからな・・・。

Do you understand? と、言ったら「understandって何だっけ?」とか言い始めた・・・。

く平沢家く

あゝ、俺は今平沢という名の馬鹿に勉強を教えている。秋山、琴吹と協力して…………。

そのうち、真鍋が差し入れのサンドイッチを持ってやってきた。

和「唯ね、私が熱を出したときプリント毎日持ってきてくれたの。」

まあ、その優しさというか友達想いなところがとりえでもあるからな。

唯「私、風邪ひいたことなくて……………」黒一「馬鹿はなんとやらだな。「黒一！」……………」」

いや、だってそう思うだろ。この設定自体コレをいうために作られたようにも思えてくる……………」

その後、お喋りは続いて無駄に時間を浪費した。ほんと、無駄にだ。そして、本題に戻る……………」

黒一「よし、じゃあ、ここやってみろ。」唯「え〜と……………」……………」出来た！」

漚「これだけ解ければ合格点くらい取れるだろ。」琴吹「これで追試もバッチリね。」

唯「ありがと、漚ちゃんにムギちゃん！……………」それに、クロ君も。」黒一「ああ。」

まあ、大丈夫なんじゃね？秋山や琴吹が教えたんだから。何とかなるだろな……………」大丈夫か？

（数日後・音楽室）

あ、今日は追試のテスト返しの日だったよな。・・・大丈夫だよな。
・俺の予感よく当たるからな・・・。

唯「み、みんな・・・ひゃ・・・100点取っちゃった！」 滯
&黒「極端な子（奴）！」

琴吹「これで、追試は終わったわね。お疲れ様♪」 唯「ありがとう、ムギちゃん♪」

黒一「コード覚えてたんだろ？ちょっと、弾いてみる。C A m 7
B m 7 G 7弾いてみる。」

唯「バッチリさあ！XでもYでもなんでもござれ！」 『ん？』
何だよソレ・・・。。。。。。。

黒一「お前もしかして・・・忘れたとかじゃ・・・」その通りです・

・・。「お前はどんな脳してんだよ・・。」

滯「・・・黒一・・・唯の事・・・頼んだぞ？」 黒一「お前まで、ボケ始めたか・・・。」

黒一「もう無理だ・・・俺がどんな手を使ってもコイツは助からん。」 唯「へっ？」

「へっ？」じゃねエよ！また、振り出しかよ！もう・・・・・
・萎えました・・・・・。

慶「やったぞ、クロ！追試にどうか・・・「天に召されろ！」うお！何てダイレクトな・・・。」

慶は亮に助けてもらったらしい・・・。もう・・・疲れた・・・投げ出したい・・・。
パンリ

#3 黒と中間テスト（後書き）

このまま行くと14話で完結・・・？なんてことにはなりませんよ
？
W
W

もちろん、今までのが1話で全部収まっただけです。

感想・アドバイス、待ってます。

#4 黒と合宿part1 (前書き)

さすがに、分割しないと話が保たない・・・。

と、いうわけで何分割かしてみたいと思います。

それと、このpart1は半分・オリジナルになります。

#4スタートです。

#4 黒と合宿part1

〔音楽室・放課後〕

漣「合宿をします！」 唯&律「合宿!？」 黒一「あ、そう。」
はい。こんな感じです。

漣「言っとくけど、朝までみっちり練習・・・」
「着ていく服買わなきゃ♪」
「まあ、頑張れ。」・・・。

俺は人事(つーか、半分人事)みたいに適当にスルー。平沢達は趣旨を分かっていない様子。

漣「違う!夏が明けたら学際でライブだろ!?!それなのに一度も音あわせしてないなんて・・・。」

唯「高校の学園祭って凄いいんだよね!?!」 律「おう!そうだが、唯!」

それから、お化け屋敷やらメイド喫茶やらで完全に話が反れたところで秋山の制裁が加えられる。

そして、琴吹もちょうどやってきた。いつも通り、菓子はバッチリみたいだ……。

紬「マドレーヌ……食べる……?」

黒一（何故、そうなる……。）

そして、琴吹にも合宿とその趣旨を伝えた。俺は行く気ねエがな。

紬「合宿っ!?!行きたいです!?!?」 黒一（こいつも、趣旨間違えてねエか……?)

まあ、仮にも真面目なお嬢様だ。一応、練習は真面目に取り組むだろう……。

問題は天然娘とデコカチューシャだ。アイツらは恐らく遊ぶ事しか考えてねエだろうな。

黒一「だが、場所とかどうすんだ?費用は?スタジオ付きの別荘とありゃ別だが……。」

澤「そ、それは……。」 黒一「あ、ちょっと待てよ……。」

ん・・・？あるじゃねェか・・・。ウチんとこの親父持ってたじゃねェか・・・。

もう、あの屋敷も他人の家のように思えてきたな・・・。うん、自律したということか？

紬＆黒「ありますよ（あるぞ・・・）。」『あるんかい！！！！』
完全に忘却してたな・・・。

唯「だったら、クロ君のことでムギちゃんのところ。どっちの方を使わせてもらう？」

黒一「俺のところは、どうか分からない。あ、やっぱ無理だ。親父にお願いなんてごめんだからな。」

／／／／「そんなにパパが嫌いなのか・・・？」「パパ？」／／／父さん！
／／／／「まあな。色々あんだよ・・・。」

やっぱし、秋山は子供っぽいところがあるな。内面はかなり弱そう・・・。

黒一「すまんが、琴吹頼んだ。練習頑張れよ・・・『へっ?』・・・
何だよ・・・」

唯「何で、クロ君行かないの!?!?」 律「そうだぜ! 皆で行かなきゃ意味ないだろ?」

黒一「俺は個人的に練習する・・・。それに、考えてもみる。問題があるだろ「何が?」

紬「性別・・・・・・・・かしら・・・・・・・・?」 黒一
「その通りだ。だから・・・漑「でも、それじゃあ・・・。」

漑「音合わせするのに、黒一が居なかったら意味ないだろ・・・?」
黒一「そりゃそうだが・・・。」

紬「大丈夫よ! 部屋別だし、黒一君なら信じられるし!」 唯「そ
うだよ、クロ君!」

そんなに言われて断る気も起きねえし、まあ、いいや・・・どうでもいいや・・・。

黒一「OKOK・・・チャントサンカシマス・・・
・・・」

というわけで、何か参加することになったらしい（人事）。

＼弓道場への通り道＼

気晴らしに矢でもぶっ放しに行こうと思った。一応、精神統一のため・・・。

母親から貰った竹弓と鷹の羽の矢が4十棒矢2本が入ったケースを
しよって弓道場に向かう。

耳にはイヤホンをつけて何か違和感があるがそれでも弓道場に真っ
直ぐ向かう。

滞「あ、黒一じゃないか！」 黒一「ん・・・？秋山か・・・どう
してこんな所に？」

漣「私はいいい歌詞が思い浮かばないから散歩に・・・ねえ、黒一。それ、弓と矢？」「ああ。」

漣「へえ、黒一って弓道習ってたんだな。」「今から気晴らしに撃ちに行くところだ。」

漣「私も、行ってもいい？」「別に構わんが・・・マナーは守れよ？色々あるんだ。」

そうか・・・そういや、学際でやる曲はオリジナルの方がいいよな・・・。

俺も、曲を考えてみるか・・・。

（弓道場）

黒一「上から傍観できるようになっているが、くれぐれも正座でな。あと、ジロジロ見すぎるな。」

まあ、今は、人がいねえし立ってても大丈夫そうだな。「うん。分かった！」

俺は、受付を済ませて下に降りる。弓を袋から出して弦^{つる}を弓に張る。前がけ十かけ装着。

四本の鷹の矢を取り出して床に置く。二本を持って、一本は弓に引っ掛ける。

弓の放つまでの過程を行い、狙いを定める。肩の力を抜き矢を放つ・
・命中だな。

side 濡

へえ、黒一ってギターだけじゃなくて弓まで出来るなんて凄いな
♪

私、スポーツとかそういうのにも興味あるからなんか興奮しちゃう
んだよなあ♪

濡「何か、こっちが緊張しちゃうなあ。あ！当たった！

ギター弾いている時みだけど弓を引いてるときの黒一もカッコ
イイな！」

side 黒一

黒一「ふう・・・満足だ。ん・・・？アイツよくずっと見てられたな・・・。飽きることなく。」

もう、50本くらいは撃ったぞ！正座してとなるとかなりキツイはずだが・・・。

未だに、目を輝かせている。そんなに、面白いか・・・？

（帰り道）

滯「やっぱり、弓引くのにな力があるのか？」 黒一「そうだな・・・この弓は13kgだ。」

正直、高校生ともなれば女子でもある程度は引ける。あ、そうだ！ゴミ処分ついでに・・・。

でも、こんなもの普通受け取るか・・・？まあ、物は試した。

黒一「じゃあ、これをやるよ。ゴム弓つつって練習用のやつだ。貰い物だが俺はもう使わんから。」

マニュアルも付けといてやるから・・・。一応、3500円相当らしいぞ？」

滞「い、いいのか、本当に？」「ああ。是非とも受け取ってくれ。」
マジかよおい……。

というわけで、ゴミ処分兼お株もあがったという一石二鳥な結果だった。

滞「ありがと黒一！いい歌詞も浮かびそう！気分転換になったよ！」
「そりゃ、よかったな。」

ここで、秋山とは別れた。疲れたので寄り道はせずに真っ直ぐ家^{マンション}に向かう。

（自室）

黒一「さてと、あの馬鹿二人の対策を講じなきゃならないな……。遊ぶ気満々だったし……。」

それと、オリジナルの曲を考えるんだったな……。」

とりあえず、ベッドのダイブ。つつい、そのまま寝てしまった……。

Side 濔（おまけ）

濔「うーん、こうかなあ・・・・・・・・・・・・・・・・。だめだ！思
い浮かばない・・・・・・・・・・・・・・・・。」

私は黒一に貰ったゴム弓というのに目をやる。ちょっと試してみよ
うかな・・・・？

マニュアルを読んでみる・・・・。そうやら、一から全て載っており
超初心者向けのようだ。

マニュアルに従ってゴムを引いてみる。

濔「う・・・・意外と、重い・・・・そろそろ放そう・・・・ブン！・・・・
いったあああ！！！！」

どうやら、髪が絡まったらしい・・・・。抜けてはいないが相当痛か
った・・・・。

よく見ると、髪の長い方は髪を留めてからお使いくださいと書いて
あった・・・・。

#4 黒と合宿part1 (後書き)

文章稼ぐために、ある程度オリジナルを長くしました。

次回からいよいよ合宿です！黒一君の別荘は使うのかな・・・

・・・？

感想・アドバイスまっています。

#4 黒と合宿part2（前書き）

黒と合宿のpart2です。特に、言いたい事はないです。

強いて言うならば、ゴム弓は誤射すると失明したりガラスも割れます（薄い奴）。

それと、ド素人作詞のオリジナルの歌詞が登場します（質は低め）

苦手だという方は遠慮せずスルーしちゃってください！

どうでもいいですねww#4 part2スタートです。

#4 黒と合宿part2

（自室）

夏休み、突入しました……。正直、合宿に行くのは今でも抵抗があるくらいだ……。

いや、そうだろ？若い男女が3泊4日だなんて考えられるか？規制もないのに……。

それとも何か？俺の感覚がおかしいのか？それとも、アイツらがおかしいのか？

しかも、その別荘には実は俺も行ったことがあるらしい……。

だが、そんなこと考えても仕方がないのでスーツケース・PRS・弓セットを持っていく。

ちなみに、弓のセットを持っていく理由は精神統一するためだ。

向こうはプライベートビーチだろうし、母親がたてた小さな道場もあるらしい。

まあ、長々とした解説はこれくらいでいいだろう。

黒一「弓とギターが嵩張るな……。まあ、索引きしないと俺落ちてかねェし……。」

時刻は7..40分。後、10分少々で着くかな・・・。

く待ち合わせの駅前く

黒一「誰もいねエな・・・」「おい、黒一く！」・・・秋山か・・・。
」 滯「早いな。」 黒一「少しな。」

滯「あれ、弓も持っていくのか？軽音部の強化合宿なのに・・・」「
弓引かなきゃ落ち着かねェんだよ。」

五分ほど経って、二つの影がこっちに近づいてきた。

律「おい、滯くクロく！」 紬「遅くなってごめんなさくい！」

デコカチューシャとブルジョワもきたようだ・・・。俺は、お坊ち
ゃまは引退したからな！一応。

律「ん？クロ、何だそれ？」「弓だ。」・・・何で、そんなもん持っ
て行くんだよ・・・「秋山に聞け。」

これ以上の説明はだるい……。平沢のリアクション聞くのが一番だるそうだな……………。

秋山に説明を任せて、俺達は平沢を待つ事に……………。

律「へえ、さすがはお坊ちゃまだな♪「矢をぶつ放すぞ……………」……………満更でもないように言うな！」

紬「そういえば、お母さんが弓をやってらっしゃったのよね？」

黒一「ああ。そうだ。」

こうして、無駄話で時間を潰して約束の8:00になった……………。

黒一「アイツ、まだ寝てんじゃね？」 漣「ま、まさか……………。電話してみるよ……………」

漣「……………い……………!!」……………おはよう……………『ごめんなさ……………い……………!!』……………プチッ！」

電話を切った。やはり寝てたか。今日も絶好の天然日和ですな社長
！・・・・・・・・・・・・・・・・なんでもない。

（電車の中）

座席は、俺が反対側の窓際に座っている。疲れた体を労うために仮眠をとる・・・・。

唯「ふう、何とか間に合った・・・・。あれ、クロ君それ何？」
秋山に聞け・・・・」「何故、私!？」

そりゃ、一番面倒くさくなくて説明係に持ってこいなのは秋山だろ。

律「なあ、何でクロはいつもやつれてるんだ？」「オーバーだろ・・・・原因の一つとしてはお前だ・・・・。」

律「なんだよく！」「お前だけじゃないが、そのボイスと無駄に働く頭のせいだ。」だから何だよ？」

適当に、田井中をあしらって精神をワンダーランドに飛ばす・・・・。
・・・・・・・・・・。

く目的地到着・琴吹家別荘・1く

黒一「なんだかんだ言ってこれが一番小さい別荘なんだろう？」「そうなの・・・。」『ええっ?!?!?』

一応、俺だってお屋敷生活をしていて琴吹家とは親しかっただけはあるのだよ。

滯「これで、一番小さい別荘・・・?」律「やっぱ、クロもおぼっ・・・いてっ!まだ、言っていないぞ!」

手刀で勘弁してやる。だが、7割程の力は込めた。結構痛いと思う・・・。

黒一「言い切ってしまったら矢を撃たねばならんからな・・・。俺なりの優しさだ・・・。」

律「なんだよソレ・・・。」唯「おい、二人とも早く早く!」

黒一「るせエ!お前が言うな!」

集合時間に起床した奴にだけは言われたくねエよ！はあ・・・大丈
夫なのか軽音部・・・。

（スタジオ）

別荘の数々の調度品を見物しながら、スタジオに向かった。余談だ
が、道場もあった。

黒一「よし、練習するか。」 漣「あれ、唯と律は？」 紬「ええ。
さっきまで居ただけど・・・。」

すると、秋山が鞆からゴソゴソと何かをとりだした。カセット・・・
？

黒一「カセット・・・？」 漣「昔の軽音部のライブ・・・。」
紬「へえ〜。」 ジャンジャン〜♪

そういや、桜校祭の軽音部のライブは昔有名だったんだよね・・・。
俺達より・・・。

黒一「断然、うまいな。」 漣「何か、負けたくないなって・・・。
」 紬「でも・・・。」

紬「私達なら負けないと思う……」 黒一「このまま行けば間違いなく敗北だ「おい！」

漣「まったく、黒一はいいところで水を差す……」「よし、あつそぶぞー！」「オー、イエー！」

漣「黒一……済まなかった……」「ああ。分かればそれでいい……」 「ムギも早く来いよ！」

黒一「俺は、矢を撃ってくる……一時間したらそっちに行く……」 漣「ええ！？」

黒一「なんなら、矢取りやってくれるか……？」 漣「私は練習するから……」

どうせ、寂しがりだから平沢達のところに飛んでいくだろうな……もう、目に涙貯めてるし……

滞「私も行くうう！」 黒一「おい、遊ぶのは昼過ぎくらいまでにしとけよ。マジでな。」

それぞれが別れて、俺は存分に矢を放った。潮風が心地よい……。時が経つのは早く、一時間程たった。名残惜しいが一応現地に向かう。

く 琴吹家・プライベートビーチ

うわあ、本来の目的を完全に忘却してパラダイスになってる奴ばかり……。というか全員……。

遊ぶときは遊んで、はじめをつけるのが俺のモットーだ。だから今はオフタイムだ。

ちゃんと、海パンも装備して泳ぐつもりだ。一応、タオルはかけているが……。

唯「あ、クロ君来た♪」 律「おい、こっちだ！」 黒一（見えてるっつーの……。） 「ああ。」

滞「く……。黒一……。／／」 黒一「ん……。？」 律「はは、ん、滞ちゅあ、ん水着で恥ずかしいのかな？」

クロは男子だもん

ね
 〽
 ♪
 └─┘

田井中がそういうと、秋山は尚更顔を真っ赤にしてもじもじしはじめた。

黒一「大丈夫だ・・・。俺は向こうで泳いでくる・・・。」
う、うん・・・。／／／／／

にしても、こんな綺麗なところは久しぶりだ……。親父と母親と行ったつけ……。ここではない所だ。

幼い頃は今よりは構ってくれて、海に連れてってくれたこともあった。

『父さん、どうして海の水はしょっぱいの？』
『塩が溶けているからだ』
『それは知ってる。』

そう言つて、親父を無駄に困らせたつけない・・・。懐かしくて数少ない思い出だ。

鋭く質問の答えとかを突く癖とかもあの頃からは身についたのかもな・

気がつく、昼になっていた。皆で昼食をとって再び遊び始めた。

黒一「お前ら・・・練習・・・「くらえ、唯！」「キャッ！冷たい！この♪」・・・自主練しかないか・・・。」

アイツらに何言ったところで聞き入れてもらえないだろうな・・・。
間違いない・・・。

それと、楽しそうにしてるアイツらを止めたくないという思いも少しあった。

俺の小さい頃の夢は「トモダチ《・・・・》》と思いつき遊ぶことだったからな・・・。

ん・・・？歌詞、思いつきそうだな。早速、スタジオに戻るか。

「スタジオ」

黒一「曲の方は以前作ったものを見返してみるか・・・。詞の方は・・・。」

今までの自分から高校になって変わった自分。さつき得た感覚を元に創作する・・・。

俺は、不意にPRSを手にとってアンプ＋ヘッドフォンに繋ぎ弦を

弾く。

心を落ち着かせるため深呼吸をする。よし、大丈夫だ。

黒一「『その時の自分』は分からなかった 知らなかった 知りたくもなかった」

周りの 人達が羨ましくて ずっと 心を閉ざしてた

ずっと 一人ぼっちでいた それでも 構わないと思

ってた 幸せが訪れると・・・

それでも あるとき気がついたんだ このままじゃね

何も変わらないって

そうだ 今まで僕が拒んできたもの 今度はねちゃん

と 受け入れてみようかな

『ある時の自分』ならわかったんだ 開けたんだ 新たな
自分の踏み出す道が〜♪

今の思い 忘れずに何もかも振り切って〜♪ 新しい『
何か』を掴んだ〜♪

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

ずっと 僕は考えた〜♪ このまま『何か』を捨てようか
?〜♪ それでもいいかな?〜♪

答えは出ずにさ〜♪ それでも諦めたくなくて意地で『何
か』と向き合った〜♪

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

するとね あるとき気がついたんだ〜♪ 今掴んだ『何か』
ってさ結局さ〜♪

すぐ傍にあって でも気づかない とても大切な『繋がり』
ってことをさ〜♪

♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪

そうやって つまずいて 気づいて 慌てて 手に入れた
今の『幸せ』ってさ〜♪

『出会い』という名の偶然が与えてくれた『奇跡』だった

んだね
♪

そして僕は感謝するよ 父さんに母さんに友達♪ そし
て・・・『出会い』に・・・♪

ジャラ〜ン♪ 出来た・・・全部ノリで歌ってたと思う
と我ながら凄げエな・・・。

『あの、一緒に掲示板みてくれませんか？』
『……は？何でだよ……。』これが『出会い』……。

偶然なんだよな・・・なにもかも・・・そしてそれが奇跡となった・・・。

『そんな、冷たいこと言わずせめて演奏だけでも聴いてつてよ!』
これもまた然りだ。

俺が、軽音部で活動するきっかけとなった理由だ。運命を感じずに
デイスティニー
はいられない。

『偶然』に『偶然』が重なって今の『幸せ』があるというわけだ・・・

黒一「タイトルは………。」

偶然という名の奇跡』————。」「

こうして俺の初めての曲が完成した・・・。
もしかすると、この曲も『偶然』なのかな・・・。

#4 黒と合宿part2（後書き）

作詞でそこそこ費やしました……。疲れた……………。

最後に黒一君の思った「この曲も『偶然』なのかな……………。
……………。」には、

黒一君の色々な思いが含まれています。あえて、言わないということ……………。

読者様のご想像にお任せします方針ですww

それと、パート部分は後々決まります。

感想・アドバイス、待っています。

#4 黒と合宿part3（前書き）

萎えた・・・part3書き終えた時点でエラーで文章があああああ！！！！！

この先は小説書いた事のあるひとは分かりますよね・・・？

しかし、めげずにリトライです！

あ、そうだ！僕の作品・・・現在では若干原作を弄っただけです。

このまま終わってもいいのか・・・否！もっと個性をだすべきです！

描きたいオリジナルの内容を検討してみます。（※ご指摘）

そのため、更新が遅くなる事もあるかもしれませんが・・・。

どうか、暖かく見守ってくれたら幸いです！

#4 part3スタートです！

#4 黒と合宿part3

くスタジオく

「うくん、パートとかボーカルとか決めなきゃならないんだっとな・
・・・・・。」

ボーカルだったら、平沢or秋山or俺が無難だよな・・・。ボ
ーカルねエ・・・・・。」

やるのが嫌だというわけではない。かといって、やりたいわけでも
ないのだ。うくん・・・・・。

ただ、ボーカルってどんな感じなんだろうと思ったただけだ。達成感
とかあるものなのか？

とりあえず、俺は現在頑張ってとっさに思いついた幻を白紙の上に
召喚しようとしている・・・。

なあに。ややこしい儀式はいらない。ただ、思い出して書くという
地味でめんどい作業だ。

くsideく

うくん、気持ちいいな・・・。ここから見える風景も一つの絵に見

えてしまうくらいだ・・・。

私は、写真とか好きだからカメラとかは携帯のやつと両方使ってる。
変・・・・・・・・かな・・・・？

何だかんだ言って、今の軽音部は私は大好きだ！ティータイムも・
・・・・・・・・。。。

黒一は、軽音部の合宿なのに弓まで持ってきて・・・ギターも弓も
よっぽど思い入れがあるんだろう。

唯や律が遊んでいる姿でも残しておこうかな。思い出の一枚をパシ
ヤリ！うん、よく撮れてる！

でも、何か忘れてるような気がしてならないんだよね。何だろう
？現在、13・・・00

「ねえ、ねえ、何かお腹すかない？」 「もう、一時だもんな！よ
し、ランチタイムだ！」

あ、そうか！お昼まだだったんだ。時間が経つのは早いな・・・・・・・・
・・・・・・・・。

「じゃあ、黒一君を呼んでお昼にしましょうか。」 「そうだなム
ギ、私が呼んでくるよ。」

side 黒一

PRSを鳴らして、さっきの曲と歌詞を思い出しながらゆっくり旋律を奏でる……………。

バンドの演奏って、こんなに楽しいもんだったんだな……。仲間ってこんなもんだったんだな……。

そんな事を思いながら。ギターの音を体中に響かせる……。早く、音合わせしてエ……………。

「おい、黒一、昼食にするぞ！」秋山か……。？弓道場に向かって言ってる……………。

ということは、スタジオそのものすら記憶の遥か彼方ということか……………。

まあ、気持ちも分からんでもないな。俺も、ここに来て後悔はしてないしな。

……………ていうか、別荘で料理するんならそこで呼ぶんじゃないかって呼べよまったく……………。

俺は、適当に返事をすませてキッチンに向かう。↓冷蔵庫の中身を確認。

「無駄に高そうな肉に、無駄に新鮮そうな野菜に、無駄にスパイシーな香りのカレーのルー……。」

皆さんは、お分かりだろうか……？これから、何を作ろうとしているのかを……！！！！！！

はい。正解はカレーです。ってか、カレーのルーが出ている時点で答えは出ているんだが……。

そんなことはどうでもいいので、とっとと準備を始める。↓とりあえず野菜を洗う↓……etc

すると、秋山達が出来てきた。遅すぎだろ……あれから、20分経っている。あ、米を炊かねば……。

「ごめーん、あれからまた唯達が遊び始めて……」
「滞だって、遊んでたじゃん！」
「それは……。」

コイツら最低だな……。人待たせた上に料理まで下準備やってろと……？

「……るせエ。いいから、手伝え。」
「え、黒一は先に準備してたの！?ごめん……早くしろ……。」

俺達は、料理が出来る尚且つ真面目そうな人員2人を調理係に任命

した。秋山と琴吹だ。

足を引っ張りそうな馬鹿まっしぐら共は、食器やらの雑用係に任命された。

田井中はブーブー言っていたな・・・私だって料理できるとかなんとか・・・眼無視してやったが。

そして、ようやく無駄にスパイシーなカレーが完成した。ご飯も炊けたようだ・・・。

「黒一って、男子なのに料理できるんだな！「悪リイかよ・・・」ううん、カッコイイと思う！」

「にしてもアレだなく。クロってさ、おぼっ・・・・・・・・・・いつてえ！「俺の優しさだ。感謝しろよ・・・。」」

恐らく『・・・・・・・・・・ちゃまだから、料理とか、からっぴしだと思ってた♪』と、言いたかったんだろう。

「一人暮らしだったからな。中二の頃から。「そ、そうなのか？」ご両親は、今どちらに・・・？」

琴吹も知らなかったのか。となると、俺の親父達はあまり交流して

いないのか。どうでもいいがな。

とりあえず、仕返しという意味も含めて俺は少し捻くれた言い回しをする・・・。

「……今はいねエ人達だ。『……』。』」
「へっ？」

この天然娘が あああ！ いらん事は、しつかり覚えてやがったよ！！
！ 言うんじゃなかったな・・・。

「チイツ！・・・・・・海外で別居してるだけだ。その間、一度も日本には来なかったがな・・・・・・。」

「ば、馬鹿、変な言い回しするなッ！ 私の同情してやった気持ち
を返せ！ ヤダネ……。」

ていうか、それだけでも、同情してくれたっていいんじゃないか？

今は、昔見たドラマかなんかの名台詞だ。気にしないでくれ……。

その後は再び、お遊びタイムとなった。（俺を除く・・・）まった

く、何しにきてんだか……………。

くスタジオく

そして、俺は再び白紙の上に魔王《譜面》を召喚する儀式《思い出す》をし始めた……………。

「何で、中々思い出せないんだよ……………マジで、幻だったのかよ……………。ドラマじゃねえんだぞ……………」

こうして俺は、魔王復活の儀式を夕方までかけてやり遂げて何とか復活させることができた。

P R Sの弾きすぎのせいか、指がそこそこ地味に痛い。ほんと、地味に辛い……………。

時刻を見ると、18…30だ。外はまだ夕日が沈みかけていると言ったところだ。

歌いながらもあったので喉がカラカラ……………。とりあえず、飲み物調達に……………。

くキッチンく

「お、クロ、夕食作ってくれよ！」「早く、練習しないと！」「漑が一番はしゃいでたじゃん。」

まあ、予想通りだからいい……。いや、自業自得かもしれないな。

いや、しかし、今まで遊び呆けてた奴が作曲&作詞してた奴に言う言葉がそれかよ！

自業自得とは言え、非常にはらただし……。何も言えないのが、もっと悔しい……。

「おら、そこどけろ！とつとと、終わらせるぞ！秋山・琴吹手伝え」「う、うん「わ、分かった」

こうして、何とか、夕食を済ませてスタジオへGO！長かったな……。

スタジオ

「おやすみ」。「おやすみなさい……。」「二人とも、起きろー！」「起きてください！」

何なんだよ、マジで……。信用した俺が、一番馬鹿

だったの・・・？これって天罰か・・・？

ぶっちゃけ、俺がおやすみなさいしたいくらいだ。遊びつかれて寝る・・・。ムカつく。

「ちなみに、俺はずっと練習してたぞ！作詞&作曲やって一曲完成させたぞ！「ええっ！？」」

「弓道場にいたんじゃ・・・。ていうか、何で呼んでくれなかったんだより！「お前が言うか？」」

秋山の言葉を詰まらせたところで、寝ている馬鹿二人を叩き起こすことに・・・。。。。。。

「おい、さっさと起きねェと弓でぶん殴るぞ・・・」「そ、それは、だめよ！」「・・・うるさい・・・。」

ムカツ！！！！！！何が、うるさいだよ！？てめェらの耳使い物にならなくしてやろうか！？！？！？

「・・・ほお。そうか、そうか。なら、永久にその耳使い物にならなくしてやろうか！「待った！」」

秋山に止められた。見ると、あいつもアンプにベースを繋いで構えている・・・何故止めたんだ・・・？

「黒一がやると、本当に耳が使い物にならなくなるからな・・・」
本当に破る気だった。」・・・。」

マジトーンで言ってやった。秋山はそれ以上は突っ込まず、ベースを弾いた。・・・るせエな・・・。

部屋中を鈍くて低い独特の音が埋める・・・。至近距離で聴いていた馬鹿二人は身を振じらした。

「ギター持てない・・・」「SG系にしとけば良かったじゃねエか・・・。ってか、立てや、コラッ!!！」

「なあ、今日はもう練習やめにしないか？」「何言っただ、弓でぶん殴るぞ」「だってえ・・・。」

子供のような声で、駄々こね始めたので本気でぶん殴ろうかと弓を手にしたとき・・・。

「律うゝ、最近何か太ったんじゃないかあ？最近、ドラム叩いてな

いからかなあゝ？「ひいいッ！」

すると、田井中は我武者羅にドラムを叩き始めた……。単純な馬鹿でよかった……。

平沢は、俺の渴で叩き起こした。何とか、練習は始まった……。疲れた……。

「これが、俺が作曲した文化祭ライブの曲の候補だ『おおゝゝ！！！』……るせェ……。」

「凄いな、黒一！いつの間に、こんな物を……。」「秋山達のはしゃいでいた時だ。」「ごめん……。」

「とは、言ったものの……。まだ、ギターの譜面しかできてねエ。他は後で何とかする。」

それと、リードは平沢。お前がやれ。「へっ？私……？」ああ。そうだ。」

何を思ったのか……。平沢が『ふんすっ！』って意味不明な言葉をほざいた。やる気が出たならいいが。

「よし、あともう一つ作曲してあるって琴吹が言ってたよな？」「ええ。歌詞はまだだけど……。」

歌詞は置いといて、曲だけでも練習するぞ！特に、田井中。聞いてるか？「聞いてます！」

「黒一が部長だったらなあ……」「う、うるせえ！部長は私だ！」「おい、田井中！」「チェッ！」

そして、練習開始……。俺は、オーシャン（平沢のTシャツのロゴ）とマンツーマンだ。

しばらくして……。「あ、アレやるんだった。クロ君、早く外に行こうよ！」「ああ？アレってなんだ？」

どうやら、遊んでたアイツらだけで打ち合わせしてたようだ……。俺は知らねエぞ……。

（琴吹家別荘のベランダ）

「コレ終わったらすぐ練習するからな！」「呑気にスイカを食ってる奴がよく言えるな……。」

秋山も何か、練習もう疲れたんじゃないか？集中力も欠けてるように見える。

「わーってるって♪」よく見ると花火？が設置してある。・・・
・・・シューー！シューー！

噴出し花火が点火したようだ。「それじゃあ、最後の曲、いっくぜえ〜！」・・・は？

最後までくそも、まだ一曲も完成してないだろ・・・。
細かいツツコミは、おいておこう。

そのうち、打ち上げ花火の色とりどりの光が当たり一面を照らした。
幻想か・・・？

「オーイエー！オーイエー！・・・ってあれ？もうおしまい・・・
？」「予算がなあ・・・。」

「で、何がしたかったんだ？無駄に、部費まで使いやがって・・・
「それは、その・・・な、滞！」

「わ、私に振るなあゝ！」「まあ、いい。中々、綺麗だったし・・・
「じゃあ、次は武道館で派手に！」

「武道館・・・？」「おいおい、俺達が決めた絶対にたどりつかない
目標だろ・・・。「一言余計だろ！」

「だったら、これくらいできるようにならないとな！」 例のカセ
ットを取り出す。・・・。

「へえゝ、うまいな。」 「だから、頑張ろう！負けないように！」
そう言った直後。

秋山に悲劇が起こった。『お前らが来るのを待っていた・・・。』
恐ろしい言葉が飛び出した。

秋山にとってはお化けの声そのものだろう・・・現に秋山の表情が
固まった。

それだけなら、まだ良かったのだが・・・どうやら神様は、鬼畜な
ようだ・・・。

『――――』
ツ!!!!!!!!!!・・・カチャ・・・』

「・・・るせエな。ん・・・？最後の音・・・」B面に切り替わったのね・・・。「聞こえない聞こえない・・・。」

聞こえないって・・・今、ちゃんと聞いただろ・・・至近距離でハッキリと・・・。

それに追い討ちをかけるように田井中が秋山に何かを呟く・・・すると、遂に泣き出した。

「りっちゃん。「やりすぎよ・・・。「そうだ。めんどいだろぅが・・・。「あのなあ・・・。ごめん滞。」

「大丈夫だ。ただの音声だ。生きた人間の。「生々しいから普通に言え、普通に・・・。」

「大丈夫だよ、滞ちゃん。「お化けなんかじゃないわ。」「・・・・・・ほんととお？」ムッ！・・・。

普通に考えて超お宝映像だよな……。写真に残しとくか。何かに使えるだろう……………。

俺は、お宝画像をこっそり携帯に納める。脅しに使えるな。哀れ、秋山 滯15歳！

さらに、神様の鬼畜な秋山いじめは終わらなかった……………。

「「萌え〜萌え〜〜キュンッ！」」 平沢&田井中…………鬼畜だな。人の事言えねエがな……………。

〜スタジオ〜

「ごめんな、滯…………「ぶう〜。唯ちゃん、でも本当に…………」「うん！いくよムギちゃん！」

~~~~~ ジャラーン。この曲……………ッ！！！！

「凄い！完璧よ〜。」「エヘヘ♪」「お前…………絶対音感持ってたんだな…………」「絶対音感って？」「秋山。」

例によって、説明係の秋山に説明してもらう。便利だな、秋山は・  
・・・・・。

「でもミヨッソンって部分が、分かんなくて・・・」ミヨッソン？  
「チョーキングの事か？」

何を思ったのか、田井中が平沢に『チョーキング』している。・・・  
予想通りのボケだな・・・・。

「ほら・・・音を出している最中に弦を引っ張るんだ。やってみろ  
「・・・・・あ、出来た！」

まったく、コイツは凄い時とそうでない時のギャップが激しすぎる  
な・・・・・。

＼side黒一＼

俺は大浴場を一人独占している・・・・。幼少の頃もこんな感  
じだったな・・・懐かしくて切ない・・・。

マーライオンから、延々とお湯が流れ出るのをただ見つめていた・  
・・・・。

「にしても、凄げエ開放感。．．．．昔は何とも思わなかったけど、今となってはこのざまか．．．」

ということは、お坊ちゃまではなくなったということでもあるんだが．．．複雑だなア．．．」

親父との関係は、昔程悪くない。別に、馴れ馴れしくしたいわけではないが．．．．．

今なら、許せるような気がする．．．．．いや、いつまでたってもダメ親父だな。

く露天風呂く

「えーと、これがこうで．．．「これは、こうだ。後は薬指をパツ！と．．．「うん、分かった！」

「トヤツ！．．．．はうっ！指つったあ！「大丈夫か唯！？」  
うふふふ♪何かいいね♪「？」

「皆で、演奏するのって．．．合宿も凄く楽しい！これも滞りちゃんのおかげだね！ありがとう♪」

「ええ・・・そ、そんな!」「おっ! 濤の奴照れてるぞお♪」の、  
逆上せただけだっ!」「ふん♪」

「ねえ、ムギちゃん?」「なあに?」「ムギちゃんも作曲とか得意なの  
「ううん、べつに・・・。」

「でも、ピアノやってたから何回か・・・ね?」「へえ」。皆  
凄いな。私って得意な事あったっけ?」

「side 黒」

練習も済んで時刻は、10..40。寝るには十分な時刻だ。一日目  
の終了だな・・・。

「・・・悪かねえな。確かにグダグダだが、その『グダグダ』が面  
白いのかもしれない。

練習は勿論。この、『グダグダ』も含めて『軽音部』なんだろう  
な・・・。」

よくよく考えてみれば、産まれて初めての合宿というか、仲間と寝泊りする日でもあるのだ。

この『グダグダ』もいいが、やっぱり練習もしないと武道館なんてお話にならないな……。

それと何を思ったのか、不意に俺は携帯を取り出して『あること……』をする。

くアメリカ・とある豪邸で……

「黒一の奴は元気にやってるのか……夏休みに入ったしな……  
……」「会いに、行ってみる？」

「ん？誰からだ？……ツ！……そうだな。近いうちに会いに行つてやるか……」「ええ……そうね。」

携帯のディスプレイに確かに【斉藤 黒一】の文字が書かれている。  
件名は【無題】だ。

【親父、母さん、元気にしてるか？俺は、軽音部の部活の合宿中だ。  
弓も持参してる。

PRSと竹弓……ちゃんと今でも使ってる。手入れもバッチリだ。

夏休みに入って、高校生活も充実している。暑さに倒れんなよ？



と言っても日本じゃねエな。

――END――】

）side 黒一）

「はぁ・・・・・・・・・・。柄でもないことするんじゃなかったか・  
・・・・クソ親父め。」

悪いと思っでんなら、返信くらいしてみやがれってんだよ！・・・・  
・・・・マジできやがった・・・・。」

俺は、携帯を手にとってメールを確認する。・・・・柄じゃねエ事は  
するんじゃなかったぜ・・・・・・・・・・。





【野郎】と書かれていた・・・。

【元氣ですかー！ー！！！！！！】

【よお！黒一！オウ、水口 慶・16歳！ていうのは、冗談でゝ実はさあゝゝ……………。】

見る気ねエし！死ね！アイツにはつくづく失望・絶望・殺害（心）させられたし・・・・・・。

俺は、電話帳からアイツにコールした。  
・・・・・ツ！ど  
うやら、出たようだ。



紛らわしい事するからだ……。アイツは断末魔と共に消滅してる事を願う俺…………。

そして、電話を切って何事もなかったかのようにフカフカのベッドに潜り込む…………。

「あ…………あ…………柄でもねエメール送って、ほんと損したわ…………！」

布団を頭までかけて寝る……。この時は気づかなかったが、もう一件着信があった事に…………。

#### #4 黒と合宿part3（後書き）

長くなりました。二度目の正直です！

そうそう、台詞の部分のアレをなくしました。はい。アレです。アレ。

そろそろ、合宿編も終わらせて学園祭にしなければ・・・

感想・アドバイス、待っています。

#### **#4 黒と合宿part4 (前書き)**

今回か次回話くらいで、合宿編を終わらせたいと思います。

＋その次は、顧問編ではありません。（※ネタばれ）

進行速度が遅いですが何卒、ご了承ください。

#4 part4スタートです。



## #4 黒と合宿part4

く 琴吹家プライベートビーチside黒一く

【斉藤 大悟】・・・・・・・・・・確かにそう、書かれていた。・・  
・ 下衆野郎でなく親父だ。・・・・マジか・・・・。

件名は【暑中見舞い】と書かれていた。いや、別にそんな暑くはね  
エんだがな。まあ、いい・・・・。

【黒一、あの電話以来久しぶりだな。そんな長々しく語ろうとは思  
っていない。

俺のPRSと母さんの竹弓はまだ、続けてくれたんだな・・・・。  
ありがとな。

暑中見舞い名義で今度、お盆に日本に帰る事にしたんだ。よろし  
く頼むぞ。

それと、屋敷でパーティーを開くから友達も呼んで来なさい――  
――END――

バリバリ、長ったらしく書いてんじゃねエかよ・・・・・・・・・・  
・・・・。随分と偉くなりやがって。

うーん、あの親父にしちゃ上出来のメールだな。だが、何をよろし  
く頼まれろと・・・・？

でもまあ昔とは、だいぶ変わったみたいだな。ってか、どんな顔だったっけ……？

顔写真もここだけの話、どっかに無くしたというより捨てたのだ。2年前に……。

合宿も2日・3日と過ぎていって、あつという間に合宿最終日に……。

この3日程の練習で、実力もなんだかんだでそこそこ上がった。平沢の才能も見抜けたしな。

すると、田井中 律（通称…馬鹿まつしぐら）が調子に乗って最終日は遊びまくろうとか言い始めたの

だが、そんな事俺が許すわけないのだが流れ的にそうなった。今までも相当遊んでたのにな……。

秋山は裏切らないと信じていたがメチャクチャ乗気だった……。  
……あくまで軽音部だな……。

しかし俺も軽音部の血には逆らえないのか、結局すんなり許して遊んでいる。血筋は恐ろしいな。

平沢と田井中は海辺で水のかけあい。秋山は、綺麗な場所を探している（探検）。俺は水泳だ。

琴吹は……平沢達にうつとりしている……。あ、  
アイツも仲間に加わったぞ……。

とにかくだ。最終日のテーマは【思い出を残す!】に決まったのだ。こういうのも悪くねエな。

「あ、りっちゃん隊長! あそこに、大きな魚が!」  
「おお! モリならあるぞ!」

モリ………? 魚取る気だったのかよ………  
……。一応、俺も沖から平沢達の所へ向かう。

そして、何となく確認してみると……特徴的なヒレがある海の名物、サメでした………。

でも、小型なサメで別に危険はなさそうだった。………  
Let's challenge to shark!!!

「おい、田井中「何だ、クロ?」「ちょっと、そのモリを貸せアレに挑戦する「マジかよ!」?」

マジのマジだっつーの。とりあえず、モリを受け取りサメに狙いを定めてモリを放つ。

よくよく考えたら、弓に似た感じだった。どうりで、やり易かったわけだ………。

見事にモリは命中して、サメが暴れ始めた……が、日頃から弓を引いている俺の敵ではない。

海面から突き上げる。とっ〇たどろろ!!!!と、叫びたかったが  
恥ずかしいのでやめた。

「・・・仕留めたぞ・・・」「おおっ!!!!・・・パチパチパチ  
パチ!!!!」「・・・昼飯の食材だな。」

「ねえ、クロ君。コレ食べるの・・・?」「ああ。バツチりさばいて  
やる・・・」「フカヒレ・・・・・・・・。」

いや、ヒレからはあんま剥ぎ取れねえと思うが・・・・・・・・。  
M〇を思い出すような言葉だな・・・。

「皆、どうしたんだ・・・・・・・・って、どうしたのソレ!?!  
?」「・・・・・・・・ついさっき、捕獲した。」

確かに、サメ貫通してるし大量出血だし・・・・・・・・。秋山  
から見れば、俺は殺人犯なんだろうな。

「見えない聞こえない・・・見えない聞こえない・・・」「・・・目  
の前にあんだろ。「ひいひい!!!!!!」

何か、このリアクション見るためにサメを取ったみたいない感じになっってしまったな。うん……。

とにかく、犠牲になったサメのためにも責任を持ってキッチンに向かいお造りにしてやる。

さばいてみたが、ヒレは無に等しかった……。……。ので、廃棄することにした……。……。

そして、新鮮なサメの刺身をアイツらの所へと運んでいく。秋山は、まだへこんでいた……。

「……。ほら。できたぞ。「フカヒレはねえのかよー!」「剥ぎ取り失敗というか、無かったぞ。」

そして、俺らは刺身を堪能することにした。……。……旨いな。さすがは、サメだな。

いや、琴吹家のプライベートビーチにいただけのことはあったな。秋山は手をつけていない……。

「濡ちゃんも食べなよ♪おいしいよ?」「黒一君が、せっかくとつてくれたんだから……。ね?」

「う、うん。いただくよ。……。……。あ、おいしい……。

「……。」「でしょ♪」うん、おいしい！」

琴吹の優しい言葉と口調で秋山の心のダメージが回復されるんだな・  
・・・・・

「そろそろ、俺は矢を撃ってくる・・・・。先に、上がるぞ。

「あ、私も行きたい♪！」「私も♪」

というわけで、全員ついて来るようになりましたとき。集中できないのは否めないがな・・・・。

～ 齊藤家・弓道場～

まず、かけをフィットさせる。いい感じの手触りだ・・・。かけを手袋にしてもいいかもな・・・・。

「おお、でかいな！」「すごい！クロ君、重くない？」「・・・重くない。引く方が、重いぞ。」

何発か適当に、撃つ。二連続の皆中を決めたところで、天然娘が動き出した。

「私にも引かせて!」「・・・じゃあ、素手で引いてみる」俺は弓を平沢に渡す。・・・大丈夫か? (弓)

引くまでの過程を適当に教えて、平沢が弦を引<sup>つる</sup>張った。・・・大丈夫か!? (弓)

「・・・だめだ・・・引けない・・・」まあ、13kgだからお前にはきついかもな。」

何となく、頬を染めて「私もやらせて!」オーラを放っている秋山に弓をわたしてみた。

「私はいいよ・・・」みたいな事いいながら、弓はしっかりと受け取っていた。・・・大丈夫だろうな。

「ん~~~~ッ!!!」・・・だめだ、私にも無理だ・・・「黒一君、私も引いてみていい?」

今度は、琴吹にバトンプス。・・・田井中は本当にいいと言っていたから。ラストチャレンジャー

となる。・・・さあ、最後だ。あと一息だ!がんばれ! 頑張るんだ! (弓)

「ふんすっ！引けました♪」「早！」「はエな・・・」「すごいな、ムギ！」「すごい、ムギちゃん！」

ラストチャレンジャー…琴吹 紬によって、竹弓は敗北した。・・・よく頑張ったな・・・。(弓)

その後も、日が落ちるまで遊びまくった。こんな馬鹿騒ぎしたもの、人生初だ。

以前の俺なら、絶対他人と馬鹿騒ぎなんて考えられなかったな。どうやら、性格も含めて何もかもが

高校生活を境に激変してしまったようだ。・・・何故俺は、水口とつるんでいるんだろう？

それだけは、未だに分からないままだ・・・。まあ、腐れ縁(?)なんだろう・・・。

～琴吹家プライベートビーチ・夕暮れ～

あと、一時間程で桜ヶ丘に帰る。空は、うつすらオレンジ色がかかって綺麗だ・・・。

秋山以外は、全員おやすみなさい状態だ。俺は、砂浜に座って親父の事を考えていた・・・。

何で今更、メールを送ったのかとか・・・。俺は、親父達と本当は



一緒に居たいのか……etc

「何考えてるんだ、黒一？」「……秋山か……。ああ。ちよつとな。親父の事について考えてた。」

すると、秋山も俺のとなりに座り込んだ。……ロマンチックだが、別に興味は無い……。

「昨日の晩にメールを送ったんだ。そしたら……。」「お父さんから、返事が着たのか？」

「どこかの下衆野郎だった……。」「下衆野郎……。？」「水口だ。」  
ああ……。

そこは、納得してくれるのか……。つか、下衆野郎で納得したのかよ！？哀れ、水口 慶！

「……翌朝気づいたらもう一件、着信があつてな……。親父だつたんだよ。「良かったな！」」

「でも何で、俺はメールなんて今更送ったんだろう……。許そう

なんて思ってもないのにな……。」

「黒一らしくないぞ……。？許すとか、許さないとか、事情はよくわかんないけど……。……。」

でも、いつもの黒一なら何て言うんだろう……。もっと、ビシッ！としてるはずだぞ！

嬉しいなら、嬉しいでいいじゃないかそれで。深く考えることなんて何もないよ。」

俺らしくない……。か。だな。まったくだ。恐らく、自分自身の変化に少し困惑しただけだろう。

自分で考えておきながら、何でこんな事思ったのか……。秋山に感謝だな。

「……。そうだな。秋山の言う通りだ。サンキューな……。……」  
「べ、別に……。……」

て、照れてんのか？何故……。……。余程、恥しがりやなようだな。……。こっちまで、恥しい……。……。

「あ、そういえば……。親父がお盆に屋敷でパーティーするから



「ねえねえ、パーティーやるんでしょう？私も……」……黙ってたらな……。「がってんです！」

はぁ……。もう、帰る時間だ。さて……。荷物の片付けでもするとするか……。

～平沢家・side憂～

お姉ちゃん、ついさっき帰ってきました。少し心配だったけど、無事帰ってきてくれました！

お姉ちゃんはやっぱ楽しかったんでしょうか、ずっと合宿中の話をしてくれます。

「……。でね、クロ君に弓引かせてもらったりしたんだ♪引けなかったけど……。」

でね、その前にクロ君がサメを捕まえてお刺身にして皆で食べたんだ♪」

あれ、でも、お姉ちゃんは遊びの話ばかりだ。ふふっ♪お姉ちゃん良かったね♪

「良かったねお姉ちゃん。でも、ギターの練習は？」勿論、したよ

「クロ君先生にビシビシと！」

黒一さんにギター教えてもらったみたいです。じゃあ、絶対うまくなってるはずだよね！

「あ、そうだ憂々。お盆にクロ君の屋敷でパーティーするんだって♪一緒にいこうね♪」

屋敷・・・？もしかして、黒一さんのお家ってお金持ちだったのかな・・・？

「え、でも、私が行ってもいいの？」「大丈夫だよ。皆連れて来いってクロ君言ってたし♪」

黒一さんがそういうのなら、是非、御呼ばれしたいと思います。楽しみだな♪

「ちようどお母さん達、旅行に行ってるし。着ていく服、買にいかなきゃね。」「うん！」

く黒一宅・自室く

「皆連れて来いなんて適当に言ったものの．．．．．大丈夫なのか．．．．．?」

まあ、親父が呼べと言ったんだ。どうなっても、知ったこっちゃないがな．．．．．。

「にしても．．．．．合宿は新鮮だったな．．．．．。これが、楽しいというものなのか．．．．．?」

素直に楽しいとか感じられない．．．。でも、新鮮＝楽しいでいいだろう。

「秋山の言った通り、俺らしく思ったことは素直になって堂々とすればいいんだよな．．．．．。」

秋山からとてもいいことも教えてもらえたしな．．．。心の蟠りは、もう完全に残っていない。

さてと、夏休み中に平沢がリードギター弾けるようにまた練習の日々だな．．．．．。

前向いて、堂々と、俺らしく．．．．．。

#### #4 黒と合宿part4（後書き）

はい。次のエピソード・・・・・・・・お分かりですね・・・？

話自体は進みませんが、1・2話程つきあってください・・・。

それと、ヒロインは滞です。まさかの、後書きで発表ww

感想・アドバイス、待ってます。

**#4. 5 黒と再開！ part 1 ※続き更新しました。（前書き）**

オリジナルの話なので、4・5ということにさせていただきました。

恐らく、次のパートに繋がるかと思います。（※前書き書いてる時点）

黒一君とパーティーのお話ですね。親父（斉藤 大悟）も登場！

他、母親（斉藤 茜）などなど………etc

思い後々、そこそこ関係ある新オリキャラも登場するのでは是非チェックを………。

それと、この物語のナレーションは第三者視点＋黒一視点でいきます。

side○○の場合は、そのキャラオンリーor第三者視点でいきます。

#4. 5スタートです。



## #4. 5 黒と再開！ part 1 ※続き更新しました。

くクラブ帰り・夏真っ盛り！く

8月6日・・・・・・・・本日も晴天！夏真っ盛りである。しかしその分、気温も高いのだ・・・・・・・・。

道路からは陽炎が見える・・・・。見ているだけでも、暑くなってしまったようなこの光景・・・・・・・・。

そして、バテバテな1人の少年+@がいた。・・・・何故か、その少年だけ異様に辛そうだ。

「・・・・・・・・ツ！！・・・腹立つくらいの暑さだな・・・

「まあ、確かに猛暑日だしな・・・。」

黒一は、この暑さに怒りたくても暑さで怒る気にもなれないでいた。この日は35℃

今は、軽音部メンバー+下原・水口と灼熱の道を歩いているところだった。

「・・・アチィ・・・・・・・・とりあえず、どこかの下衆野郎がくたばればいいのにな・・・」「誰だ、ソイツ？」

お前がソレを聞くと、答え辛いな……。まあ、黒一も暑さでやられているわけで……。

「お前に最も近くて、けど気づけない存在……。そんなところだ。「ん……。あ！黒一、お前か！」

ヘラヘラとふざけた事をぬかしやがった水口に怒りパワーを100%チャージした黒一。

だが、黒一も暑さでバテている。暴力でアイツを這い蹲らせるのは、あまり効率的でない。

頭を使ってアイツのトラウマでも引き起こしてみるか……。効果は期待できるはずだ。

「スピーカー……。うひい！！！！また、耳鳴りがああ！！！！うがああ！！！！」

下衆野郎は、合宿中に起きた楽しい《……》思い出がトラウマになったようだ……。

スピーカーと言うだけで、耳鳴りで悶絶してくれるなんて体に優しいんだろう……。

「なあ、スピーカー……って？」「アイツが現在、最も恐れ警戒する最凶の言葉だ……」「？」

「そーいや、明日の話だが……」「おお！パーティーだよな！」「……てめエは呼んでねエぞ」「ッ！」

水口はいつの間にか復活していた……。どうやら、パーティーがスポンワードだったらしい……。

「クロ君、水口君がかわいそうだよ！」「黒一。一応呼んどいてやれ。

「黒一君……ね？」

最後の琴吹の合間が気になったがな。下原がそう言うのなら……。……一応呼んどきゃいいのだ。

というわけで、黒一は一応下衆野郎を呼ぶことにした。

「下原に免じて一応呼んでやる……」「おお、マジか！」「スピーカー……」「サンキュー！」

もう免疫ができたのか……。？いや、水口は一時的な衝撃により聞こえていないだけだろう。

恐らくもう、そろそろタイムリミットなんじゃないだろうか・・・？

「スピーカー！」「くう・・・！いい、いい加減やめてくれ・・・」「チ  
イツ！・・・効果が薄れてきたか・・・。」

黒一は念には念をと強調して言ってみたが、やはり免疫がついてき  
ているようだった・・・。

「・・・すまん。下衆のせいで話が止まったな。今、屋敷は従弟の  
家族に預けているんだが・・・。」

実は、パーティーというのも親父じゃなくて従弟が提案したもの  
だったらしい・・・。」

てっきり、親父が考案したのかと思ったら・・・やはり駄目  
親父だったか・・・。

それと、さっきからブーブーと言っていた下衆野郎を黒一は蹴りで  
制裁を加えた。

「まあ、それはいい。従弟のところには15歳の新上 聖也という  
来年、高校生になる受験生がいる。

しかも、桜ヶ丘を受験するらしい・・・。おまけに、キーボード  
が使える・・・。つまり・・・。」

「ムギちゃんと同じだね！」「違げエよ！」「黒一君、その聖也君を勧誘するの？」「ああ。そうだ。」

ただでさえ少ない部員……。あんまり少ないと、来年に支障を来たす恐れがあるのだ。

しかもこんな普段、やる気の微塵も感じさせないようなクラブに入部する奴がいるだろうか……？

黒一は、それを見越して何とか聖也をゲットしようと思った筈だった。

「……だから、一曲でも2曲でも披露するために練習するぞ！」「でもまだ一曲しか……………」

「だったら、秋山。お前が書いて来い。今日中に。」「む、無茶言うなあ……！！！」

……とか、なんとか言ってたくせに引き受けてくれた。うん。やれば出来る子さすが！

黒一達は、平沢達の買い物につきあってファーストフードの店に向かった……。

＼MAXバーガー・桜ヶ丘店＼

「一緒にポテトは……」ケツコウデス……「では、そちらの方でお待ちください……。」

俺は、アイスティーを頼んだ。なぜ、一緒にポテトなのか意味不明だな。

バーガー買ってない俺もどうかしてるかもしれないんだが……それは、おいておこう。

平沢達のいる席に座って、聖也ゲット作戦について会議を行うことに……。

「渡しそびれていたが、これが譜面だ。ちゃんと全員分用意してきた……『おお……!!!!』」

周りに聞こえるだろ……。黒一は頑張って昨日、徹夜で完成させたものだ。かなり苦労していた。

新上 聖也……聖也とは、仲は悪くなかった。むしろ、良かったほうであろう。

幼少の時、黒一のところにも何度か預けられていて唯一心を許したのも聖也であった。

会うのは何年ぶりだろう・・・？確か、中二の時から会っていないから・・・3年ぶりという事になる。

なんとしても、聖也をGET！したいところだ。黒一は、純粹に聖也と会いたいと理由もあった。

聖也は黒一の事を慕っていて、『兄さん、兄さん！』と呼ばれていた。黒一も認めていた。

そして、黒一達は一週間で『偶然という名の奇跡』をマスターしようとしたのだった・・・。

と、琴吹が作曲した曲に詞を付けるべく、秋山も動き出したのだった・・・。。。

side聖也

来週には三年振りに、黒一が帰ってくる。色んな事を思いながら聖也は、ドキドキしていた・・・。

「懐かしいな・・・聖也兄さんが帰ってくるのは・・・・・・・・何か、妙に緊張するな。」

聖也はピアノを琴吹同様。幼い頃から習っていた。そして、小松利暢に憧れたらしい……………。

そのうち、ピアノよりキーボードに興味を持ち始める。↓中学からキーボードに転職。

色々あったものの、ピアノをやめてキーボード一筋になった。

本人曰く、キーボードの方がカッコいいと思うかららしい。勿論、ピアニストとしても健在だ。

＼side＼

「黒一の従弟かぁ……。どんな子なんだろう……。？キーボードって言ってたしムギと同じだよな。」

ツインキーボード……。また、演奏の幅が広がりそう！」

黒一は部員獲得作戦と称していたけど……。やっぱり、聖也とまた居たかったのかな……………？

うまく言えないけど……。遊びたいというか……。また、二人で何かしたかったんだと思う。

＼side＼



「聖也君・・・ふふっ♪黒一君ったら・・・本当は聖也君と一緒に居たかったのが本音なんじゃないかしら。」

私と同じだから・・・ツインキーボードになるのね。うん！演奏の幅が広がりそうね♪

滯と紬には黒一のもう一つの純粋な理由が見抜かれていたようだった・・・。

恐らく、人と群れるのを嫌っていた頃の黒一が心を許している（推測）ところから分かったのだろう。

♪パーティー前日・商店街♪

今日は、着ていく服（黒一は持ち合わせている）を買うのにつきあう予定だ。軽音部十和だ。

直前に唯が和を誘ったのだ。・・・俺的にはまるで問題なかったので許可した。

親父は寛大（というより馬鹿）なので俺の友達とかいう肩書きがあれば誰でもWELCOMEなのだ。

「あの・・・私もほんとは行っても良かったの・・・？」  
「大丈夫

だ……。肩書きがありゃな。」

そう、ほんとに肩書きがあれば誰でもWELCOMEなのだ。ある意味、寛大な親父だ。

「ねえ私達、何か持っていなくていいのか？」「いや……。待て律。よく考えてみる……。。」」

「私達の演奏で十分なお土産だな……。。」。「……。。」。うだ。気持ちだけで親父は十分だろ……。。」

くパーティー当日・待ち合わせ場所く

「場所は海辺の○○という所だ。恐らく、琴吹は来たことあったか？」「うん。一回だけ。」

「豪邸……。豪邸……。豪邸……。豪邸……。」「ご飯……。ご飯……。」「黒一……。黒一が俺を！」

左から順に、馬鹿まっしぐら・天然馬鹿まっしぐら・下衆野郎のコメントだ。

「ゆゝい、はしたないわよ・・・」律もだぞ！「下衆野郎。お前だけストーリーカーということにするぞ。」

「・・・されたらどうなるんだ・・・？」SPが何かに捕まって大変なことになるんじゃない？「NO！」

『水口 慶という名の下衆野郎なんか知らねエ・・・。』と、黒一が言ったら一発なのだ・・・。

「・・・さて、どうする・・・？」・・・シズカニ、ダマツテマツテマス・・・。「・・・まあ、いいだろう。」

くパーティー会場・黒一家お屋敷く

『おおく！』 「む、ムギの別荘の20倍はあるんじゃないか・・・？」「そうかもな・・・。」

客観的に見ても満更ではない。相変わらず、紬は平然としていた。さすがは、現役お嬢様だな。

「さすが……いや、なんでもない……」学習したようだな田井中。「学習って、何が？」

お、インテリ眼鏡（真鍋）が食いついてきた。……言っても分かんねエだろうがな……。

「……言ったら最後、矢で撃ち殺されると言われている死の呪文だ……」いや、全然わかんないから。」

「り、りっちゃん隊長！突撃許可を！」よし、許可する！突撃だ……  
・「不法侵入で訴えるぞ……。」

ってか、入るのは不可能だ。入り口は無駄に馬鹿でかくて丈夫な柵が行く手を塞いでいるからな。

ここを通るには、黒一が持っているオートロックキーが必要だ。（  
これまた、無駄にハイテク……）  
両親の写真は見つからなかったが、オートロックキーだけは見つかったのだ……。

シュッ！と、手早くロックを解除すると重々しい柵がスライドして道を空けてくれた。

約二年ぶりに、お屋敷に入った。久々で、自分の家だったのだがその豪邸振りに圧巻してしまった。

馬鹿まっしぐら共は再び、妄想し始めた……。下衆野郎は反省して黙りこくっている。

すると、正面から見覚えのある顔が現れた……。実に、3年振りである。

「黒一兄さん！……聖也か？久しぶりだな。」 周りから、嗚咽が聞こえるんだが……。

いや、はたから見たら生き別れの兄弟の再会になってしまっているぞ……。

とにもかくにも、俺は聖也と再開することができた。

**#4. 5 黒と再開! part 1 ※続き更新しました。(後書き)**

更新遅れてスイマセン・・・・・・・・・・。

次話投稿も即効ですので、後書きはこの辺で!

感想・アドバイス、待ってます。

#### #4. 5 黒と再開! part 2 ※続き更新しました。(前書き)

やばい・・・引き伸ばしといった割りにクオ低めなんだが・・・

とりあえず、現段階(※part 2投稿直後)は始めの振りみたいなだけです。

それで、勘弁してください・・・まあ、part 2の次回予告みたいなの？

前回の後書きで書き忘れていたんですが・・・

それと、視点とかをよく注意されたんで改善してみたんですが・・・

いかがだったでしょうか？改善前と改善後を比較してみて。

また、苦情があったらすぐに改善していきたいとおもっています。

ですので、気づいたことがありましたら気軽に教えていただけたら幸いです

以上、前回の後書きで書けなかったことです。

#4. 5 part 2スタートです。

## #4. 5 黒と再開! part 2 ※続き更新しました。

「・・・おい、生き別れの兄弟の感動の再会!みたいな設定にするな・・・」だってえ・・・・・・・・・・。」

嗚咽していたのは、天然馬鹿のほうだった。・・・まあ、聖也も聖也なんだが・・・・・・・・・・。

『兄さん!』とか言われたら、完全に生き別れた・・・(略)設定になってしまುದろ・・・・・・・・・・。

「す、すいません・・・。昔から兄さんみたいな存在だったんで・・・」  
・「黒一兄さん・・・プッ!」

・・・デコカチューシャまっしぐら は、やはり学習していないようだった・・・・・・・・・・。

「・・・とりあえず、黙ろうか?」「はい♪はい♪」「へえ、黒一って結構慕われてるんだな!」

確かに、慕われていた。黒一も聖也を弟みたいに思っていたのだ。  
(幼少期まで)

中学に聖也が進学したくらいから会っていないため、近頃は忘れか



けていたのだ。

「では、中に案内します。兄さんは忘れてるかもしれないから……  
「……ああ。そうだな。」

おじさんとおばさんも首を長くして待ってるよ！」

そうか……親父達と遂に面会か……。……どんな顔なんだろうな？……一番気になるな……。

すると、秋山と琴吹が肩を叩いてきた。後ろの方に下がってみる。

「なあ黒一、本当は聖也とまた一緒にいたかったからあんなこと言い出したんじゃないのか？」

「だって、聖也君が『兄さん！』と呼んでも当然のように振舞ってたから……。」

いや、『生き別れ……（略）みたいになるからやめろ』と俺は言った筈なんだがな……。

「はぁ……。まあ、それも一理ある。だが、部員の問題の方が大事だからな。」

「そっか……。黒一はいつでも、先を見越しているんだな。合宿の時も皆をリードしてたし……。」

黒一には、周りを引っ張っていく力があるんだと思う。」

そうなのか……。？黒一自身はまったく気づいちゃいない。黒一の反応は……。

「いや、違う。お前らが駄目なだけだ。並の人間なら普通だろ。」  
「……やっぱり、先の撤回……。」

「ねえねえ、クロ君早く中に入ろうよ！皆、待ってるみたいだし！」  
「……ああ。ちよい、待ってる。」

合宿の時もこんな感じで始まったような気がしてならない……。  
……。

〳〵 齊藤家・パーティー会場 〳〵

このドアを開けた先に顔すら覚えていない両親がいるのだ。……



「黒一……！！！！」なんて言うと思ったか？馬鹿夫婦。『ええ〜！！！！』「……ふふっ……。」

それでも、親父達は笑っていた。むしろ、緊張が解けたような感じだ。

「黒一が昔のままで何よりだ！……それに、ちゃんと弓とギターも続けてくれてるみたいだしな。」

持参している弓と楽器を見て親父達は笑った。……何も、嬉しくねエがな。作戦の為だ。

弓は、母さんと後で勝負して負かすために持参した。馬鹿夫婦には、負けたくねエし……。

「御託はいい……。宴会でも何でも、さっさと始めるぞ。」「クロ君！パーティーだよ！」「そうか……。」

いや、お盆にパーティーする方がつつこんだほうがいいと思うのだが……。

そして、無駄に馬鹿騒ぎした後。俺は母さんと弓道対決することになった。

「・・・俺、負けねエぞ?」「あら?自信満々ね。私だって、まだやれるわよ!」

母さんは・・・うん。何か、すごく明るい。俺と比較したら、全然正反対な人だ。

あ、余談だが、俺が弓道勝負で勝った。これっぽっちも負ける気がしなかったしな。

「なあ、黒一。お前のギター・・・聴かせてくれないか?」「今から、演奏してやる――

「聖也のためにな。」「え、僕に・・・?おじさんじゃなくて?」「今、言った筈だが・・・?お前のためだ。」「

「おい、やるぞ。『うん!』『聖也、スタジオに行くぞ。』・・・うん!わかった兄さん!」

何だかんだで、全員スタジオに行く事になった。親父は呼んでないのにな・・・。

くスタジオく

アンプに繋いで準備OK 各自、配置につく。俺はボーカルなので、中央に……………。

「『偶然という名の奇跡』聴いてくれ聖也。『パチ！パチ！パチ！パチ！パチ！パチ！パチ！』」

「ワンツースリーワンツー！」田井中がリズムを刻む俺も相当、緊張していた。

「『その時の自分』は分からなかった 知らなかった 知りたくもなかった」

周りの 人達が羨ましくて ずっと 心を閉ざしてた

♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪

ずっと 一人ぼっちでいた それでも 構わないと思  
ってた

それでいい いつか僕にも 幸せが訪れると……………

♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪

でもね あるとき気がついたんだ〜♪ このままじゃね  
何も変わらないって〜♪

そうだ 今まで僕が拒んできたもの〜♪ 今度はねちゃん  
と 受け入れてみようかな〜♪

♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪

『ある時の自分』ならわかったんだ 開けたんだ 新たな  
自分の踏み出す道が〜♪

今の思い 忘れずに何もかも振り切って〜♪ 新しい『  
何か』を掴んだ〜♪

♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪

ずっと 僕は考えた〜♪ このまま『何か』を捨てようか  
?〜♪ それでもいいかな?〜♪

答えは出ずにさ〜♪ それでも諦めたくなくて意地で『何  
か』と向き合った〜♪

♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪  
♪

するとね あるとき気がついたんだ〜♪ 今掴んだ『何か』  
ってさ結局さ〜♪





どうやら、今からMCをやるようだ。あれ？平沢さんにポジションを譲った・・・・・・・・？

「クロ君は照れ屋さんだね」「るせエ。苦手なだけだ・・・」  
「そういうのを、照れ屋って言うんだよ？」

周りから、どっと笑いが起こる。僕も、つい笑ってしまった。意外と照れ屋なんだね兄さんは・・・。

「黒一、照れてんじゃねエよ！」「・・・天に召されろ。」「マジトーンで言うなよ！？おい！？」

周りの人達も賑やかだ・・・。とても楽しそう・・・。僕も、こんな風な生活が送れたらなく・・・。

・・・・・・・・桜高に受かったら、僕も兄さん達とこんな馬鹿騒ぎができるんだ・・・・・・・・。

すると、隣にいた平沢 憂さんが僕の肩をちょんちょん！と、つついてきた。

「お姉ちゃん達・・・楽しそうだね・・・。私達も早く桜高の生徒になりたいね。」「うん、そうだね。」

どうやら、憂さんも同じ事を考えていたらしい……………。  
その気持ちは僕も同じだ。

「改めて、ギターのクロ君！「俺はいい……………」ええ、クロ君  
の照れ屋さん♪」「じゃあ、次……………」

秋山さんや琴吹さん。部長の田井中さんを紹介してくれた。琴吹さんは僕と同じキーボードらしい。

おや？……………何か、打ち合わせているのかな？皆、目を合わせてどうしたのかな……………？

「そして、最後に未来の新人部員！キーボードの新上 聖也君です  
！」

え……………何を言っているのかさっぱり、分からない……………。僕の名前が呼ばれたのだ。

未来の進入部員か……………。よし！こうなったら、とことんつきあってみよう……………！！

「来年、軽音部に入部する新上 聖也です！必ず、桜高に合格して皆さんと演奏します……………！！」

堂々とハキハキした口調で喋った。よく見ると、あまり笑わない兄さんが一瞬微笑んだ……………。

（通常視点）

（大成功だねクロ君！）（ああ…………。平沢、演奏完璧だったぞ。）  
（これで、一人獲得だな。）

平沢が何かを思いついたように、『はっ！』と息を呑んだ。どうやら、調子に乗ったらしい…………。

「そして、もう一人！私の妹、憂です！」「え、ええ！わ、私！？」  
唯、憂に無茶振りしちゃだめよ。」

「え、えーと、私はお姉ちゃんの事とか色々あるし…………。その…………。保留…………という事で…………。」

おい…………駄目な姉が無茶振りするから、妹めちやくちゃ必死にフオローしてたぞ……………。

「聖也…………ありがとな…………。「いや、僕が好きだから決めた

事だしね。『ヒュー！ヒュー！』

柄でもなさ過ぎる事は言うもんじゃねエな……。特に、下衆のつく奴が冷やかしてくる…………。

秋山も加勢して、何か言ってるみたいだからとりあえず皮肉つく…………。

「実は、もう一曲ある筈なんだが……。秋山が歌詞を考えてこなかったので出来なかった。」

俺は合宿の時に作ったんだが……。秋山は一番はしゃいで遊んでいた…………。「うおーい！ちよい待て！」

秋山、スライディングツツコミ決まりました。すかさず、反撃をするのか…………！？

「…………そ、そりゃ…………遊んでたけど…………。その時考えておけばよかったんだけど…………。…………。」

申し訳ございません…………。結局、反撃どころか自ら降参したようだ…………。情けねエ…………。

こんな、グダグダなMC(?)だが皆笑って拍手喝采を送ってくれた。達成感満載だ。

※体力的な問題上、明日は次話＋若干の続きを更新予定です・・・

## #5 黒とさわ子先生の秘密! ? part 1 (前書き)

はい・・・更新チャレンジ4回目です。恐らく書いた文量は10000オーバー。

相当頑張りましたが、少し目を放してる隙にPCが落ちてました。

悔しいです!・・・・・・と、いうわけで、いまにいたります。

とつとつ、執筆したいので前書き大幅カットで、

#5スタートです

## #5 黒とさわ子先生の秘密! ? part 1

〔音楽室〕

「りっちゃん、おいっす・・・」「おいっす・・・クロも挨拶しろよ・・・」  
「気温が5度下がったらな・・・。」

おかしい・・・九月の中旬・・・。にも関わらず、真夏日や猛暑日が当たり前のように続いている今この頃。

PRSを持つ気にもなれねエ・・・。聖也の一件以来、練習してないしな・・・。。

・・・。。いや、今更だがまずくないか・・・? やベエ・・・。  
・なにやってんだよ俺・・・。。

どうやら、暑さのせいで俺ですら練習拒否・ティータイムを許してしまったらしい・・・。

「ねえ、りっちゃん何見てるの?」「ああコレ、昔の軽音部のアルバムみたい。」

中を覗いてみる・・・DEATH DEVIL・・・? 過激だな・・・。  
・。ってか、いつの時代だよ・・・。

「いつの時代のバンドだよって、感じだよな。」う、うん、そうだね! 「平沢……………」

適当に、相槌を打っているようだが恐らくバンドのイメージがコレしかなかったんだろう。

「濡が見つけてきたんだ。「へえ、何か歴史を感じるね!」……………」いや、感じねェだろ。」

秋山って、前もカセットテープとか掘り出し物見つけてきたしな……………」

恐らく、前世は犬もしくは鴉かなんかだったんだろう……………。思考もおかしくなってきた……………」

〜その10分後〜

「おい、秋山。その部分はこの方がいいんじゃないか?」「うん……………」確かにそうだな。「いたっ!」

天然まっしぐら(略して改名)が、指を振ってなにやら痛がついている。おおよそ、指でも切ったか?



「皮むけちゃった」・・・「うわ、痛々し！」「濡ちゃんも見て見て」  
「見えない聞こえない・・・。」

出ました。秋山の特殊能力『現実逃避。』暗示をかける事により嫌な事を避けることができるのだ。

俺としては、なんとも羨ましい能力だ。暗示能力があれば・・・。  
・・・（省略）

・・・はたから、見てるとムカつくな（黒一から見て）あ、田井中  
が攻撃を開始したようだ。

俺も便乗して、秋山肅清作戦を執行することにした。まず、プロセス  
を見てみよう。

赤ペン（水性）を用意する。↓指にリアルな傷を書く。↓秋山に接  
近する。↓・・・

「おい、秋山。「ひいっ！な、何だ、黒一か・・・きゃあああ！！」  
「ダメーだ・・・。」

あ・・・気づいたときには時既に遅しと言わねばいいのか・・・。  
秋山が気絶してしまったようだ。

ダメーにしては、我ながらリアルだなとは思ったが・・・。気絶す  
るまでは予測不能だった・・・。

「おい、秋山……」「……………」。「……………？死んだか……？」「濤を勝手に殺すな！」「ねえねえ……………」。

平沢が、何か言ってるが秋山を叩き起こすのが優先なのでとりあえず眼無視しとく。

「ごめんなさいね……………譜面台持って行くわよ？」「さわ子先生……………」

／＼さらに10分後／

「はあ！？軽音部の存在を生徒会が認めないだど！？！？」。「いや……………まあ、そうだけど……………」

認めない↓訂正；認めていない。生徒会が、軽音部を作るなみたいな感じになってしまった。

事の始まりは、琴吹が学園祭のライブのための講堂使用許可を得に行った時のことだ。

なんと、軽音部は講堂の使用を許可できないどころか存在自体、確認されていないという。

とにもかくにも……。え……。いや、ありえないだろ。やべえ……。頭の中はカオス状態だ……。

「部員はちゃんと4人揃ってるのに……。」「部活申請用紙出してねエとか……。？」「ギクリッ！」

ん……。？田井中の表情に異変が起きたのを黒一は見逃さなかった。凶星……。だろうな……。

しかし、それを言うと話が進まなさそうな気がするので目をつぶることにした。

「律、申請用紙はちゃんと出してたよな？」「う、うん、バッチリ！（確信犯だろ……。）」

「はあ、田井中がそう言うんなら生徒会にでも行って原因でも突き止めに行くか……。」

というわけで、生徒会室に向かうことになった。余談だが、初めて行く。

（生徒会室）

「真鍋、ちよいと調べてほしいんだが・・・」「うわっ！何で、和ちやんがここにいるの!？」

今日も早速、天然まっしぐら（略して改名）は絶好調なようだ。恐ろしい程に・・・。

「真鍋は何度も生徒会に入ったと推測できる言葉発してたろ・・・」「そうよ、唯「あ、そうか!」

「で、調べてほしい事って何かしら?」「軽音部が部として認められてないらしい。「そうなの?」

いやに淡泊なやつだな・・・。満更でもないみたいな口調で言いやがったよコイツ・・・。

そして、慣れた手つきでペラペラとプリントをめくっていく・・・。  
結果は――

「確かに、ないわね。・・・」「そんな!私はちゃんと出したぞ!・・・はっ!まさか、これは!」

苦し紛れに何か語り始める田井中。無駄に周りの空気をシリアスっ

ぽく変えた。

「これは、軽音部のような弱小部を潰すための生徒会の陰謀！「ええっ！和ちゃん！嘘でしょ！」

天然まっしぐらまで食いついてきやがった……。後ろでは、紬が微笑んでいる……。カオス……。

「……お前、相当苦しいぞ……」「何を言っているの？」「私はちやんと……」「出してないだろ！」

秋山がくしゃくしゃになった部活申請用紙という名の証拠を見つけ、持ってきたようだ……。

まあ、最もここからだアレが部活申請用紙かどうか見分けがつかないがな……。

「……まあ、分かってたけどな。」「バ、バレてましたか^^」「たりめェーだ。」「すみません……。」「

どうやら、後で書く的なノリで結局書かなかったらしい。琴吹にも若干責任があるな……。

「しょうがないわね・・・私が何とかしてあげるわ。」「すまねエ真鍋。墮部長が迷惑かけたな。」

「誰が、墮部長だ!」「・・・お前。」「・・・え」と、墮ぶ・・・部長は、田井中さんね。」

コイツも墮部長ついていいかけたよな? 本心、そう思ってんじゃねエのか・・・?

「で、顧問は?『顧問?』」「そういや・・・俺らの顧問誰なんだ?」「忘れてた・・・」「・・・」

何か、今回の件で色んな問題が軽音部にある事を発見したな・・・・・・・。すると、秋山が・・・。

「結局、律のせいじゃないかあゝ!!!! 何で、嘘ついたんだよゝ!!!!」「あゝ、痛いゝ。」

今更、キレ始めたというか・・・八つ当たりし始めた・・・。琴吹も参戦するのか・・・??

「まあまあまあまあ、りっちゃんも悪気があったわけじゃ

ないし・・・「ムギは甘いんだ!」

『まあ』を何回言ったら気が済むんだよ……。性格の表れなんだろうな……………」

「なんていうか・・・軽音部って唯にぴったりだと思う。」「・・・馬鹿にしてんのか?」「違うわよ……………」

いや、完全に馬鹿にしていた。確かに、軽音部はカオスの塊であると自負しているが……………」

「それより、顧問の宛てを探さなきゃならねエ…………」。真鍋、心あたりは? 「え」と……………」

「担任の先生は?」「バスケットだ。」「あ、英語の先生は空いてるわよ!」「…………」パスだ。」「何でよ?」

コイツ…………。何故、あの先公が空いてるのか…………。それは、変態だからである。

非常にキモい。水口の百分の一くらいキモいからだ。…………水口は、次元を超えた変態だから別物。

「はあ……しょうがないわね。じゃあ、山中先生に頼んでみたらどう？」「山中先生……？？」

山中先生といや、とても評判のいいあの先公か……？猫をかぶってるようにも見えるあの先生……？

いや、仮にも音楽教師だ。性格も悪くなさそうだし、とりあえず、聞きに行くしかない……。

（廊下）

顧問の宛てを探した結果、最も適任且つとても優秀な先生を見つけた。山中 さわ子先生だ。

その物腰の良さと容姿の美しさ・楽器の扱いと歌声の素晴らしい我が校の誇る音楽教師だ。

故に、生徒達からだけでなく先生達の間でも人気の高い。ファンクラブまであるらしい……。

「というわけで、やっていただけませんか？ちなみに、YESの答えしか聞きません。」

「え、ええと、なってあげたいのは山々んだけど吹奏楽部の顧問



だから・・・・・・・・。。。

掛け持ちはちょっと・・・・・・・・。。。「YESしか要りません」「黒一・・・、やめとけ・・・・・・・・。。。」

「練習も自分達でするんで！」「ここにハンコ押すだけ！ね、簡単でしょ！」「YESですよね？」

チィッ！・・・・・・・・。。なかなか、諦めないな・・・・・・・・。。。  
。。平沢が何か、がん見している・・・・・・・・。。？

「先生、ここの卒業生ですよね？」「え、ええ。そうだけど・・・・？  
「何か、似てると思って・・・・・・・・。」

ん・・・・・・・・？似ているだと・・・・・・・・？あ、あの軽音部のアルバムに載ってた写真か。確かにな・・・・・・・・。。。

「ほら、昔のアルバムの・・・」「ああ！ホントだ！」「・・・その写真は今どこに・・・・・・・・？（確信犯・・・・・・・・。）

すると、山中先生は突如走りだした。ターゲットが逃げやがった。追跡開始だな。

「ちょ、おい！先生、危ないっすよ！」「うわあっ！」「きゃあっ！」「ちょ、先生！」

何だよアレ……映画でしか見たことねエぞ……。  
凄げエ、プロフェッショナルっぽい……。

そして、音楽室にスネーク・○ンした……。  
ようだ。しかし、残念ながら――

（音楽室）

「な、ない！」「ああ、写真ならデコまっしぐらが持ってますよ。」  
やっぱり、先生なんですな。

「そうよ……。私よ！」「じゃあ、この声も『ツ！！』  
『……………』やめて！恥ずかしい！」

「見えない聞こえない見えない聞こえない見えない聞こえない見えない聞こえない……。」

秋山、暗示スキル発動中……………。

「そうよ・・・・・・・・・・アレは八年も前の事・・・」「いや、語りださなくていいす・・・」「私は・・・。」

語り始めやがったー！！！！！！・・・（しばらくお待ちください）・・・・・・・・・・。

華麗な、ギター捌きまで見せてくれる！という特典付だ・・・・・・・・・・。

「先生、顔あげてください・・・」「りっちゃん・・・」「ばらされたくなかったら顧問やってください。」

「りっちゃん、たくましい子！」「・・・いや、卑怯な子の間違いだろ・・・・・・・・・・。」

はぁ・・・・・・・・・・。ようやく、顧問が決まって本当にスタートしたんだな・・・・・・・・・・。

## #5 黒とさわ子先生の秘密! ? part 1 (後書き)

更新遅れて申し訳ないです……………。

後々、4・5も更新予定です。ですが、休憩させてください……………。

感想・アドバイス待ってます。

## #5 黒とさわ子先生の秘密! ? part 2 (前書き)

一応、ペンタブ買いました。小説用の表紙だとか挿絵を描くためです。

ですが……中々、言う事を聞かずにホントじゃじゃ馬です……。

じゃじゃ馬といえば、ムスタング。ムスタングといえば、中野 梓  
ですね！

早く、一年生を入学させたい……。聖也は勿論の事です。

話の幅は大幅に増えます。オリジナルの話も書けますので。

まあ、余談はこれくらいにして本文いってみましょうか。

#5 part 2 スタートです。

## #5 黒とさわ子先生の秘密!? part 2

（同・音楽室）

「……………ジャーーン!!!!……………って感じのオリジナルなんですけど……………」

「顧問として、どう思いますか!?!」

ちなみに、『偶奇跡（※偶然という名の奇跡）』は既に演奏した。評価は、まあまあらしい…。

「うーん、さっきの曲はいいとして。今のも、リズムセクションバラとか色々あったけど…。

まず、ボーカルはいないの……………? 『……………』じゃあ、歌詞もまだ…とか……………?」

やべエ……………。猫被り顧問が、また火山爆発を……………。二の舞を踏むのは正直、ごめんなのだ。

何とか、被害を最小限に抑えたいところ……………。俺は、『被害抑制作戦A』を実行する事に…。

「いや、先生。この歌詞の担当は、秋山です。今日こそ出来てるとばかり思っていたのに……。」

「え、ちょ、ちょっと待ってよ！確かに、私が歌詞書こうと思ってたけど……。」

そう……。別に、秋山は悪くない。なぜなら、皆忘れていたのだから……。

だが、俺はちゃんと書いた十作曲もした。秋山も書く的な事言ってたしな……。

「黒一君の言うとおりです！滞には、合宿の時から言っておりまして。時間は十分ありました！」

（ナイスだ、田井中。……このまま、一気に畳み掛ける。俺に任せろ。）（ラジャー！）

なんと、俺の独断で決行した作戦を田井中は悟ったのだった……。

そして、ナイス援護射撃をしてくれた。とどめは、勿論俺がさす。

「と言う事は、秋山は今までずっと忘れてたのか？」「いや、そうだけど……………」

かなり、荒業且つせこい。だが、秋山が犠牲になる事で多少、状況は変わるはずだ。

秋山を除く…。と、いうことだが、これが自然の摂理…………弱者は土に返り強き者が残る…。

即ち、時には犠牲が必要という訳だ。…………しょうがない事なのだ…………。

とは、言ったものの秋山は精神的なダメージで泣きそうだ……………。

「それは、秋山さんが悪いわね。でも！秋山さんにまかせっきりにした皆も皆よ！」

「俺は、作詞&作曲を一日でこなしましたけど…？その時、秋山遊んでましたけど…？」

これで駄目なら、もはや打つ手がない。いや、これで駄目なら理不



尽以外の何者でもない。

まあ、定番の『連帯責任です！』みたいなオチはないよな……………？

「そ・れ・で・も……！！連帯責任です……！！」 「チイツ！……………」  
こうなったら、作戦Bで……。）」

作戦Bなど、存在するはずがないのだが……………。はあ……………。説教  
だりィな……………。

すると、無造作に琴吹がとある『最強兵器』を取り出した。作戦B  
でも決行する気か……？

だが、最強兵器というのは、もう琴吹のトレンドマーク・必須アイ  
テムとなっているアレ……………。

年中無休・いつでもどこでも、が売りの琴吹の無駄に高級そうなケ  
ーキの事だ……………。

「せ、先生！」 「ああ！？」 「ケーキ……………いかがですか……………？」

果たして、猫被り顧問にケーキは効くのだろうか……………！？ いや……  
平沢じゃあるまいし……………。

「いただきますっ！」 『いただくんかいっ！』 「……………さすが、猫

被りだな……。」

どうやら、本性は平沢並みの天然だったらしい…。いや、ただケキに目がないだけだろうか…？

まあ、平沢クラスの天然まっしぐらはそうそういねエだろうからな……。

（秋山家・自室）

「……………詞を先にすれば良かった……………ブー！…、あ、ムギからだ！」

【こんばんは、紬です。山中先生が顧問になってくれて、なんだかドキドキしています。

歌詞作り頑張って！——END——】

そういえば、ムギって山中先生の事ジツと見てたし……。うーん……。

「ドキドキか……………。まさかな。【ありがとう、ムギ。お休みなさい】…っと。

ドキドキ！うん、何か、いい歌詞思いついた！本当にありがとな、ムギ！」

琴吹のメールのおかげで秋山の作詞が捗ったのは完全な余談である……。

〓後日・音楽室〓

『できたー！？』「……………るせエな……………」「見せて見せて！」  
「ええ！もう……………」

にしても、凄げエな……………。俺だって、一晩では無理だっただろう……………。

と、いうことはだ。極限にまで追い詰められた秋山の秘めたる力と言っても過言ではないだろう…。

「……………火事場の馬鹿力……………」「へっ？何、クロ君？」「てめエじゃねエ……………」

ってか、秋山はいつまで見せない気だよ……………。なら、持ってくんなよ……………。

おまけに、猫被り顧問も火山爆発のスリーカウント始めやがったよ……。

3……………2……………1…0。ドカーーーン！！！！……………となる、2秒前に俺は秋山から歌詞を奪う。

「おい、秋山。」「な、何？」「隙あり。」「ああ！？」「ずるいよ、クロ君！」「るせエ。」

こんな感じで奪い取った。……………（歌詞読解中）……………。パタッ！……………見なかった事にしよう……。

そして、俺は山中顧問にパス。田井中達も拝見しているようだ……………。

感想1 b y. 黒一…なんかアレだな……………。凄くベタなメルヘンだな。マジないな……………。

感想2 b y. 律…うわー！すごくメルヘンチック！背中、かゆい……………！！！！

感想3 b y. さわ子…な、なんなのこの歌詞……………。ロックな私には到底理解できない……………。

ああ、もう！破りたい！！！！

と、ここまでは黒一がまともだと思う感想だ。勿論、心の中の感想だ……………。

「秋山、スマン……………。焦らせた、俺らが悪かった…。そりゃ、仕方ないよな……………」

「私としては、上手く書けたと思うんだけど……………。やっぱり、駄目…かな……………?」

「だ、駄目っていうか……………。ちょい、イメージ違ったっていうか……………」

ほら、唯も何か言ってやれ!

「凄くいい……………」 「マジで(マジかよ)!? (……………)」 「」

「じゃ、じゃあ、ムギはどう思う……………って、超うっとりしてるー  
ー!……………!」

琴吹は、平沢の3倍うつとりしていた。あまりの、良さに目を覆っている……………。

「ま、まさか、ムギもこの歌詞気に入った……………とか？」 「はい……………」

「こういうのってあり……………？」 「うん……………」

「本当に……………？」 「YES……………」

「マジで……………？」 「どんとこいです……………」

何故に、後半英語が……………。いや、そんな事はどうでもいい。まずいな……………。

「ちなみに、俺はDon'tこい。だ。」 「おう、クロ上手いな……………って、なんでやねん！」

いや、田井中の鋭いツツコミも中々のものだったぞ……………。後は、

顧問を味方につければ……………。

「さわちゃん！さわちゃんは、この歌詞ないと思うよね！？」「え、ええ、そうね……………」

あまりのショックに耐え切れなくなったのか……………。田井中がダイレクトに言っただよ……………。

ここまできたなら、いつその事俺も正直な感想を言わせてもらおうじゃないか！

「俺もこの歌詞はありえないな。こんなの歌えるか。」「クロ、ダイレクトすぎ……………」

しかし、こっちは顧問と部長という名の肩書きがある人物＋俺がいる……………。勝ったな。

「なあ、さわちゃんや、クロもそう言ってるんだしさあ……………もう少し皆考え直そうぜ！？」

ん……………？ふと、横を見ると猫被りが何か考えこんでいる……………。  
…。裏切りじゃねエよな…？

「わ、私も、この歌詞好きだな〜!」「さ、さわちゃん!?!」「…  
今更、なにやってんだよ…。」

恐らく、こういうキャピ!キャピ!したのが好きって言った方がお  
株が上がるとでも思ったのだろう。

お門違いだ……。今更、何を言うかと思いきや……。

「俺は、ぜってェーお株なんか上げねェからな。」「な、何の事か  
しら、斎藤君……?。」

「仕方ない…。この歌詞でいくか。じゃあ、ボーカルは滞って事で  
……。「へっ?。」

「『へっ?』じゃねェよ……。作者だろうが……。」「それも  
そうね……。」「

「わ、私には無理だよ〜!!!……だって、こんな恥ずかしい歌詞  
なんて歌えないよ〜!!!!。」



「ああ!?!? てめエ、作つて何言つてんだよ。召されてエのか!」  
「クロ…程々に…。」

「じゃあ、クロ……はモラル的にパスだな。ムギ、やってみる?」

「私は、キーボードで精一杯だし……。」「そうか……。」「

さつきから、平沢がアピールしている。非常にわざとらしい……。……。

「おい、田井中……。何かもう、平沢が泣き落としをしてるぞ……。」「唯、やってみる…?」

「えーえ、私そんなに歌上手くないし、私で務まるかどうか……。」「田井中、駄目だよ。」「

「嘘です!歌います!歌いたいです!」「素直に言えよ……。……。」

コイツにだけは、調子に乗らせたくないからな……………。

「じゃあ、歌ってみろ。」 「うん！えーと……………君を見てるとい  
つもハー…「ストップ！」

「ギター、弾きながら歌えよ……………」 「あ！そうだった！ジャジ  
ヤジャジャジャ！……………」

「歌はどうした…歌は……………」 「ううっ！ギターを弾きながら、  
歌を歌えない……………」

「まあ、頑張れ。」 「クロが面倒みるよ…。」 「ヤダネ。山中先生  
お願いします。」

「もう、仕方ないわね。じゃあ、振り落とされないようについてき  
なさいよ！」 「ラジャー！」

はあ……………大丈夫か、学園祭……………。そして、余談だが琴吹は  
顧問を見てうっとりしていた。

本人曰く、女の子どうしていいな…とか本人達がよかったらあり  
なんじゃないでしょうか？

とか、怪しい疑惑を残していった……………。

## #5 黒とさわ子先生の秘密! ? part 2 (後書き)

や、やっと、更新できました……………。

とつとつ、掲載したいのでこれにて……………。

ですが、一応言っておこうと思います。

恐らく更新は、3日以内に終わらせるようにしたいと思います。

あまり、時間もないし部活とかとの関係で更新が難しいのです…。

亀更新にならないように気をつけていきたいと思います。

時々、サブ小説の方も更新するのでその時は遅くなるかと……………。

感想・アドバイス、待ってます。

番外話・作者と黒一の無駄な雑談（※画像付）

>135238—4434<

「おい、堕作者。」「なんだ、クロ？」「コレ、何だよ……………」  
「何って、お前……………」

「クロのイメージ図に決まってるだろ。」「マジか……………ってか、  
クロと呼ぶな。」

「いや、よく考えてみる黒一君。前回のふざけたヤツと比べたらか  
なりマシになってるだろ？」

「…………言われてみれば、そうだな…………。まあ、堕作者なりに頑  
張ったんじゃないの？」

「んゝ、素直に喜べんなゝ。次回のは、もっと線を綺麗にして美化  
しといてやるからな！」

「あのなあ…………。あゝ、もういい。で、用件は何だよ？」「へっ？」

「てめエは、平沢かよ…………。何で、呼び出したんだよ…。」「理由はない！」「…………。」

「どうせ、時間がないから適当に俺と雑談でもして繋ごうとしてるだけだろ…………。」

「はい。その通りでございます。」「もっと、躊躇しろよ…………。」

「いや、次回話書くと睡眠時間がヤバイし？まあ、今日はもう一回更新するけど…………。」

「はあ…………。つまらん。俺は、帰るぞ…………。」「どうやって？」「…………。」

「ふふふ……。僕と雑談が終わるまでは帰れないのだよ!」「つまらん事をするなよ……。」

「じゃ、とりあえず、黒一君の質問コーナーだな。無難に?」「無難かソレ?」

「じゃあ、一つ目!黒一君の好きなものは?」「ベタだな……。ギタ―と弓だ。」

「いや、そんな事は知ってるから。もっと、裏情報を教えろよ。」「そんなものねエ……。」

「…………強いて言うなら、パーカーが好きだ…………。」「ふうん。はい次。」「反応薄いな!」

「二つ目!嫌いなものは?」「…お前だ。」「嫌いなものは?」「いや、だから…………。」

「……………船だ。」「ほほお、船酔いかあ。いい事聞いたな……………」  
「企むな……………」

「はい、三つ目！軽音部で、一番好みのタイプは？」「分からねエ……………」

「じゃあ、割かしまでもだと思うのは？」「……………秋山…いや、最近崩壊してるしな…。」

「ふうん。つまらん。はい、次！」「……………お前は、つくづくムカつくな……………」

「じゃあ、四つ目。お前ってさ、頭いい方じゃん？認めたくないけど……………」

勉強方とか、どういう風にしてるんだ？」

「俺の場合、ノートを何度も写したりはしねエな。出そうなところを探して集中的にやる。」



俺もあんま、勉強好きじゃねエからな……。。」

「あ、結局のところ持ち前の勘でなんとかしてるわけね。はい、はい。」 「ムカつくな……。」

「よし、そろそろ時間だから最後に！ 将来の夢は！？」 「お前を、八つ裂きにする事。」

「○ね……。未来の軽音部員に一言。」 「ああ？ 聖也も含めてか……。。」

「ウチは、緩すぎる部だから覚悟決めた方がいい。」 「以上で、雑談を終了します。」

「…………自分から聞いたいて、ほとんどまともな反応しなかったな。堕作者。」

## #6 黒と初ライブ!? part1 (前書き)

現在、正面顔の黒一君を作画中です。あ、今回はワイヤーとか使います。

そうすれば、もっとマシになり綺麗になるかと思われます……。

でも、影やシワを描くのが大変ですね^^..難しいです……。

他の方の作品を見ていただければ分かります。完成度が半端ないです。

まあ、地道に技法を覚えていききたいと思います。

#6 part1スタートです。

## #6 黒と初ライブ!? part 1

〽一週間後・音楽室〽

「え〜と、ボーカルは唯と黒一で、曲目が『ふわふわ時間<sup>タイム</sup>』と『偶然という名の奇跡』ね。」

……………OK。出演時間が決まったら、また連絡するわね。」

後、三日。平沢はまだ、帰ってこない。まあ、学校には来ているが放課後は未だに特訓中らしい。

「わざわざ、すまねエな。伊達眼鏡。」「これも生徒会の仕事だからって、伊達眼鏡って何よ?」

「いや、その眼鏡は生徒会長度をアップさせるための物かと思っただけだ。馬鹿にしたんじゃない。」

「失礼ね……………。伊達じゃないわよ。ていうか、生徒会長じゃないわ……………。」

黒一は、意外と先週の顧問の件で馬鹿にされた？事を根に持っていたりする。

「まあ、いいわ。それより、唯がボーカルで本当に大丈夫なの？」  
「大丈夫じゃないだろうな。」

「ちよつと、クロは黙ってろ……。先週から、放課後さわ子先生の家で特訓してるんだぜ！」

「だから、本番までには間に合うかと……。」「バタンツ！」「待たせたわね！皆！」

そこには、猫被りと天然まっしぐらの姿があった。それっぽい、顔をしている。

「さあ、唯ちゃん！見せてあげなさい！」「ふんすっ！ジャジャジャジャジャ♪」

「上出来だ。」「凄げえ！」「腕が上達している…。」「自信に満ち溢れた表情……。」

力強いな。堂々と、ハッキリ弦を弾いている。音作りもとても良い。中々、上出来だ。

後は、平沢が歌い始めるのを待つだけだ。前奏も終わり、いよいよ歌声が……………!?

「君〴〵を〴〵見てゐるとい〴〵つもハッ―ドギドギ!」 「ストップ。ちよつと、待て…。」

やべエ……………。頭ン中が混沌状態だ。いわゆる、カオスってやつだ。ツツコミたいけど……………。

え……………。何か、手がだせねエ……………。なんせ、シャレになんねエからな。

まあ、とりあえず何故にこうなったのかという点でもツツコンでみるか。

「練習させすぎちゃったっ♪」 「声枯れちゃったっ♪」 「かわいい子ぶっても駄目だー!」

なんか、猫被りと平沢が不〇家のマスコットキャラクターに見えるのは俺だけだろうか……………?

「どんな、練習したらそうなんだよ……………」 「そりゃ、激しく口ツクによ！」

だから、どんな練習だよ……………。あの、裏表の激しい顧問の事だからな……………。

ギターに関しては十分だ。『よくやった!』と、褒めてやってもいい。だがなア……………。

「ボーカルどうすんだよ……………」 「変更するなら今日中よ!」 「そうなのか!? じゃあ……………」

皆の視線が一点に集まる。……………視線の先は、秋山だ。まあ、そうなるだろうな。

「ん……………んっ!?’ 「日本語、喋れや……………。適任者は、お前以外いねェだろ……………」

「そうねえ……………濤ちゃんなら、歌詞覚えてるだろうし。」 「歌詞作った本人だしな!」

今更だが、練習して声枯れてボーカルできなくなったんじゃない本末転倒してねェか?

「頑張ってね、濤ちゃん。」 「私の分まで、頑張って！」 「う……う………バタッ！」

「まあ、頑張れ。秋山。」 「クロってさ、何故にいつも他人事みたいな言い方するんだよ……。」

いや、それは本当に他人事だろう。黒一自身もボーカルをするのだが………。

「おい、それより、顔真っ赤にしてぶっ倒れてる秋山の方は、いいのか？」 「ええっ！？ 濤！？ ？」

そして、黒一は気づく。恥しさのあまり気絶する奴なんてそうそういないんだという事を……。

前にも何度かぶっ倒れていたが、本当に今更な話だ。

「おい、とつとと、叩き起こして練習するぞ。」 「無茶だろ！」 「るせエ。水でもかけてやれ。」

はあ………直前に、こんなハプニングが起こるとは………カオス満

載だな……………。

「本番まで後三日！」「だから、なんだよ……………。相当ヤバイじゃねエかよ……………」

↓下校中↓

「おい、平沢。ボーカルの練習なんかぜってエーすんなよ。」「ええっ!？」

「でもでも、声がよくなったらボーガル出来るかもじゃないよ?」

「そもそも、ボーカルの変更は今日中だろうか?今更、無意味だ。」  
「そっかぁ……………」

「まあ、仮に変更できるとしてもだ。それで、声を駄目にしたらコーラスも出来なくなる。」

このままだと、コーラスも無理そうだ。だが、もう少しよくなれば



なんとかかなりそうだ。

「だから、今は声をよくするのに専念しろ。ギターの練習は、忘れるなよ？」 「うん……。」

こうして、平沢と俺は別れた。そして、携帯を取り出してメールを打つ。

「【平沢 憂】 【声の事について】 【姉にはミントとか喉飴でもやっつけ。声を出させるなよ?】」

はあ………。どうすつかな……。後、三日だし……。声枯れ始めたのが今日らしいからな。

さすがの、平沢妹も気づかなかったのだろうか……? 最悪だ。秋山じゃあ、不安だ。

「よお! 黒一! 通称…サイクロ! あ、斉藤 黒一だからサイクロな?」 「いっぺん、○んどけ。」

意味不明な、あだ名をつけられた上ベラベラと解説を始めやがった下衆野郎が相当うざかった。

「おおっ! 面白い、冗談だな!」 「面白くない、本音だ。お前のあ

だ名はゴミでいいな。」

「はははっ！まったまた、面白いご冗談を♪」「いや、携帯のアドレスもゴミにしといてやるから。」

「ええっ！マジなのか！？」「マジだ。ってか、うぜエから消えろ。」  
「まあまあ、そう言わず♪」

嫌に、ご機嫌な『下衆野郎。』改め、『ゴミ。』が非常に鬱陶しい。

「実はさあ、さっき薬局に行ったら喉によく効く漢方薬をおまけで貰ってさあ♪」「あっそ…。」

ん……………？ちよつと、待て！喉によく効く……………？よし、強奪するか。

「おい、ソレよこせ。」「うおっ！？何、すんだよ！」「大丈夫だ。お前名義にしといてやる。」

「意味分かんねェし！どういう事だよ？」「平沢絡みだ。気にすんな。」「気になるわ！」

面倒だが、色々事情を説明してやり漢方薬を譲り受けることになった。

「そうか！そういう事なら、ソイツは譲ってやろう！」「ああ、ありがたく頂くぞ。」

とまあ、こんな具合で平沢宅に向かった。住所は、何故かゴミが知っていたようだった。

色々、ツツコミたいところだが……。それどころでないので、ゴミについて行くことにした。

そして、平沢家に到着。そして、ゴミが勢いよくノックをした。アホだろ…………。

何故ノック？今の世の中は、ボタン型の自動呼び鈴があるだろう…………。

「はい、どなたですか？」「俺だ。黒一だ。」「あ、黒一さんです！今開けます！」

平沢 妹が、ドアを開けてくれた。エプロンを着ている所から、夕食の準備中と言った所か。

「あの、コチラの方は…？」 「社会のゴミだ。」 「違うわ！どうも、水口 慶です！」

「あ、慶さんですね！どうぞ、あがってください！」 「いや、別に…」 「お邪魔します！」

何やってんだよ、この馬鹿！コイツには、マナーとかモラルとかいう言葉はねエのかよ……………。

ここまで来たら、入らないわけにもいかないので入室することにした。

く平沢家く

「姉貴は何をやっている？」 「今、ギターの練習で疲れて寝ちゃってます！」 「……………」

「でだ。お前の姉の喉が良くなるかもしれんから、喉に効く漢方薬を持ってきたんだが…。」

「ありがとうございます！お姉ちゃん、とっても喜ぶと思います！」  
「ソイツが持つてる…。」

平沢 妹は深々と頭を下げた。相変わらずだな。さて、帰るか……  
…………。

「よかったら、夕食いかがですか？」「いや、これ以上…。」「是非、いただきます！」

もう、知らん…………これ以上の抵抗はやめていつその事、流れに身を任せる…………。

そして、黒一とゴミを囲んでの夕食となった。申し訳ないので、平沢 妹を手伝うことに…………。

「グロ、君と憂が作ってくれた料理おいじい  
よ！」

「いや、喉のためにもあんま喋んな。」「ぶうぐう！」「なあ、黒一！」「…何だ？」

「お前って、料理できたんだな！…。」「てっきり、お坊ちゃまだ

から何もできんと思ってた。」

田井中と同じ事を言うつもりだったのだろう。まあ、同じ制裁を加えてやるわけだが。

「おおっ！凄げェ！お前、もしかしてエスパー！？」「違げェよ！お前も地雷を踏むか！？」

ゴンッ！と、鈍い音を立ててゴミが悶絶している。平沢 妹は苦笑していた。

「とにかくだ。平沢 妹よ。姉貴を見張っとけよ。」「わ、わかりました！黒一さん！」

こんな感じで、学園祭まで後三日……………。

（下原弓具店）

なぜ、ここにいるのか…。実は、平沢家から帰る途中に下原と出会ったのだ。

やっと、まともな奴に会えたと思い下原のところへ向かった。色々世間話をする。（平沢の事も）

そういえば、下原の家は弓具店を営んでるそうで……。寄って  
いないか？とのことだった。

ちなみに家とは別の所らしく、もうすぐ閉店の時間だそうだ。

「へえ、結構色々揃ってんな。」「ここらじゃ、一番品揃えが  
いいんじゃないの？」

「あら、斎藤君かしら？亮の母親の、下原 香といいます。」「初  
めまして、斎藤 黒一です。」

「黒一君は、ギターも弾けるんだって？学園祭のライブ、楽しみに  
してるわね。」

「来ていただけるんですか？」「ええ、勿論！旦那も行くって！」  
「ありがとうございます！」

優しそうな人だな……。俺の母親も優しげな感じだったが、学園  
祭には来ねエのか？

「あ、そうだ！もし、良かったらコノ矢を貰ってくれないかしら？多く、仕入れすぎちゃったの！」

魚じゃあるまいし、そんな簡単に貰っているのだろうか？しかも、値札に68000円と書いてある。

「え、いいんですか！？」「ああ、持ってけよ黒一。」「ええ、勿論！」「じゃあ、ありがたく…。」

いや……でも、本当に貰っているのか？エフェクター買っても、おつりがでるような額だぞ！？

とはいえ、頂ける物はありがたく頂戴しよう。下原も、そう言ってる事だし……。

「にしても、平沢がボーカルか……大丈夫なのか？」「真鍋にも、同じ事聞かれたな……。」

下原と会えて落ち着いたところで、俺はPRSの練習に専念することにしたのだった……。



## #6 黒と初ライブ!? part1 (後書き)

やっと、更新できました……………。

感想・アドバイス、待ってます。

## #6 黒と初ライブ!? part 2 (前書き)

画が完成しました。みてみんなに投稿したので見てみてください。

色塗りのミスは見逃していただければ幸いですww

それより！昨日から、恐ろしくて信じられない程ついていません！

結局、親指の骨が折れちゃいましたよ！詳しくは、活動報告にて。

## #6 黒と初ライブ!? part 2

（1—1）

そう。この日は、小中高で一年に一度だけ行われるフイーバーな催し。学園祭だ。

高校生ともなれば、それなりにこった学園祭となる。特に、桜高の学園祭は質が高い事で有名らしい。

で、俺は何をしているかといいますと……………。『やきそバーガー』を食している。

まあ、一から事の成り行きを話そう。話は、1ヶ月くらい前から始まるわけでして……………。

学園祭で、最後に時間が取れるように当日はあまりクラスの出し物に構ってられない。

と、いうわけで、看板のデザインからやきそばのレシピから『やきそバーガー』も考案した。

ちなみに、この『やきそバーガー』は適当に呟いたつもりだったんだが、なんと採用された。

生地も種類があり、スタンダードやベジタブルや黒ゴマなど、とても奇抜である。

それがうけて、結構好評らしくて食販ランキングの1位・2位を争うレベルらしい……………。

ま、こんなわけだから、顔をださなくたって叱られることはまずないのだ。

音楽室に向かう途中で、必然的に教室の前を通るので一応顔を出してみる。

「あ、店長の斉藤君だ!」 「いつから、店長になったんだよ……………」

「はい、コレ。」 「何だよコレ?」 「何って、『やきそバーガー』よ?」 「ああ、アレか。」

そして、俺は『やきそバーガー』をありがたく頂戴した。生地は、一番人気の黒ゴマだ。

正直、『黒一』だけに黒ゴマじゃないかと思う…。お、平沢を発見した!

「おい、平沢。」 「あゝ、グロ君だ!」 「まだ、声は枯れてるがコースは大丈夫だろう。」

ていうか、コイツの服装というかカツラというか…。声のイメージとぴったりだな…………。

それと、グロ君って…………。まるで、俺がグロいみたいな言い方だな。

「まあ、いい。担当終わったら、とっとと来いよ。」「うゝん！分かったよグロ君！」

そして、俺は人込みを押し分けて後戻りしようとする。が、ここで野生の秋山が出現した！

…………自分で思っというてなんだが、ポケ○ンネタは寒いので以後、封印することにした。

「ちょっと、唯！」「あ、滯ゝちゃん！焼きぞぼゝ？ちょっと待ゝってね！」「そうじゃなくて！」

平沢 唯！懇親のボケです！さすがは、天然の金メダリスト！しかも、自然なボケが素晴らしい！

というわけで、俺も平沢に便乗してボケることにした。こういう事にはつい意地悪になってしまう。

「じゃあ、何か？焼きそバーガーか？」「だから、違うから…………。」

「知ってる。」「……………」

「俺は、今から練習しに行こうと思っていた。」「分かってるんなら先に言えよ!」「ヤダネ。」

そう。黒一は、そういう奴なのだ。意外と心は捻くれてたりする。本当は、優しい奴なのだが…。

「唯は?」「ごめん、後一時間で交代だから先行ってて!」「だそうだ秋山。」「分かった。」

渋々、秋山は納得して今度は田井中や琴吹達のクラスに向かう。確か、出し物は……………。

秋山が、この世で最も苦手なホラーの代名詞。お化け屋敷だ……………。

く悪夢の館・受付前く

「毎度ありく、ごゆっくりく。……………あ、濡にクロじゃん!どうしたんだよ二人とも?」

コイツはライブの事忘れてんじゃねエのか？って言いたくなるような発言しやがったよ……………」

「3時には本番だろ？だから、めいいっぱい練習しとこうよ！」  
「右に同じだ。」

今日の田井中は、お馴染みのカチューシャと奇妙なキノコを生やしていた？うん。生やしていた。

「で、どうなんだ？デコキノコ。」「誰が、デコキノコだ！ん、ごめん！今ちよつと無理！」

まあ、そうだろうな。後ろには、そこそこの行列ができていた。抜けるのは無理そうだ。

「ほら、こんなに並んでるんだしさ。」「誰か、代わってくれる人はいないの？」「右に同じ。」

すると、デコキノコは少し考えてから、また顔をあげて語りだした。

「ん、あたしがこの企画の言いだしっぺだかね。最初くらいはやっておかない……………」

お、意外だ。コイツが、まともで筋が通っていて責任感のある事を言うなんて……………。

「そう…………じゃあ、ムギはどこ？」 「ん。……………」  
「ありがとうございました。」

秋山は、見かけ・イメージに似合わずびりまくりの様子。そして、田井中はいやらしく笑う。

タイトルは、『悪夢の館』…………名前こそ怖そうだが、その周りに張つてある絵がちよつと…。

いかにも、手作りです！ って感じが出ているがまったく怖くない……………。

「なんか、西洋と東洋の妖怪がちや混ぜになってないか？」 「変な所に目をつけるな……………」

「あ、クラスの人が入っているよ。…………クロは、ちゃんと50円払えよ！」 「聞こえねえ…。」

秋山の特殊能力、『自己暗示。』を真似してみた。まあ、一応入って琴吹を探すことに……………。



どうせ、こん中にいるということは脅かし役なんだろうがな……………。

「よし、秋山行くぞ。」 「ええっ！わ、私は、いいよ！」 「るせエ。」  
「コラ！金払え〜！」

後ろで、デコキノコがブーブー言ってるが自己暗示の力で聞こえていないことにする……………。

外見の割りに、クオリティは高そうだ。室内は、いやな湿気というか温度が保たれている。

時折、聞こえる悲鳴をBGMに俺達は前にどんどん進む……………。正確には、引っぱっている。

「秋山、腕がいてエ…。」 「え、な、何かな！？」 「腕、放せ。」  
「え、いや、別に……………」

別になにかは知らないが、迷惑なので離してもらいたい……………。連れてくるんじゃないかった…。

まあ、しかし秋山のイメージに合わないリアクションを見るのは非常に面白いのだが……………。

「濡ちゃん。」「キャアアア!!!」「…るせエ…琴吹だ。」「え、む、ムギなのか!？」

振り返ると、お岩さんさながらの琴吹がたたずんでいた……。正直、俺も目を疑った……。

いや、特殊メイクのクオリティが半端ないし……。その道のプロでもクラスにいたのかよ…。

恐らく、今までのを見る限り皆ここで悲鳴をあげていたんだろう……。

「キャアアアアア!!!もう、いやあああ!!!…ボタンツ!」「おい、秋山!」「濡ちゃん!？」

秋山は、今世紀最大の悲鳴をあげて只今気絶中でございます……。

などと言ってる場合ではなく、どうやってコイツを起こしたのか…。じゃあ、シンプルに…

「それは、だめよ黒一君!」「…まだ、何も言ってねエぞ?」「叩き起こそうと思ったでしょ!」

何で、分かったんだよ……。引っぱたいて起こすのが無理となる

と、とりあえず引きずるしかない。

人目が少し……と言わず相当恥しかったが、なんとか目的地である音楽室に辿り着いた……。

（音楽室）

「はあ……やつと着いたな……。ここなら、琴吹いねエしフリ  
ーダムだな。」「……………」

まあ、一応カウントダウン制にして3秒以内で起きなかったらにしておく。ほぼ無意味だが…。

「3・2・1……………時間切れた。悪く思うなよ。…バシン！バシン  
！バシン！バシン！……………」

怒涛の往復ビンタでさすがに、秋山も起きるだろう。少々、荒業だが仕方ねエな……………。

「う、うーん……………なんか頬が痛いんだけど…？」「そりゃそうだ。  
俺が往復ビンタしたからな。」

4往復目……………8回目のビンタで、ようやく秋山は目を覚ました。  
当然の如く、頬は赤い…。

「何で、ビンタしたんだよ!」「誰のせいで、こうなったと思ってんだよ…。」「それは…。」

強制的に『悪夢の館』に秋山を連れて行った俺が悪いのだが、突っ込まないのならそれは好都合だ。

「いいから、練習するぞ。こちらら、時間がねえんだ。秋山は、ベースよりボーカルの練習だろ？」

……………頼むから、本番で上がって声が出ないなんてことはやめてくれよ……………。」

そんな事にでもなったら、シャレにならないからな。痛い所を突かれたのか。秋山は赤くなっている。

恐らく、俺がビンタした影響もあるのだろうが……………。

「だ、大丈夫だよ!子供じゃないんだし……………。まあ、確かにボーカルの練習をするけど…。」

今更、何言ってたか……………。コイツに子供っぽい性格があるのは百も承知だ……………。

「いや、嘘な事くらい平沢でも分かるぞ……。それに、お前が影で努力してるのも知っている。」

そう。何を隠そう、秋山のいい所は強い責任感とその努力しようとする前向きな姿勢だ。

コイツが、早めに音楽室で練習していたのを目撃した。恐らく、それ以外でも特訓してるだろう。

「バレてたか……。」「たりめエだ。お前の性格からしても分かるぞ。いいから、強がんな……。。」

秋山は、責任感が強い。故に、平沢達に心配をかけまいと思いそれが精神的な負担となるのだ。

ただでさえ秋山はプレッシャーに弱いのにこれ以上負担が増えたらどうなるか分かったもんじゃない。

「あのなア、お前は一人で背負い込みすぎなんだよ……。少し、肩の力を抜け。」

それと自分で言うのもなんだが、お前と俺は似ているところがあるからな……。。」

深く物事を考えすぎたり……黒一の場合は、一々理由や動機を求めめるような正確だ。

「平沢達に心配かけたくない気持ちも十分わかるし、その気持ちは素晴らしいと思う。」

が、お前には、その負担はキツイだろ？これが、俺達の初ライブだぞ？楽しまなくていいのか？

よく考えてみる。何で、お前は軽音部にいるんだ？ライブに出ようと思ったんだ？言ってみろ。」

「み、皆といるのが楽しいし、私はベースが好きで皆と一緒にバンドがしたいから！」

ようやく、本来の目的に気づいたか……。案外、本末転倒してしまうんだよないつの間にか。

「あ、余談だが、お前の負けず嫌いなところも共感できるぞ。」「え、私って負けず嫌い？」

「んー、まあ、さっきのひっくるめて言い換えたら負けず嫌いになるからな。」

「黒一が負けず嫌い……………クスッ！」……………笑ってンじゃねエ……………」  
「ごめんごめん。」

「最後に。これは、秋山。お前自信が言った言葉だ。『堂々としろ』」  
「うん…分かった。」

「ありがとう、黒一！よし、学園祭ライブに向けて練習するぞ〜！」  
「るせエ。音量下げろ。」

何はともあれ、これで秋山は大丈夫そうだな。それより――

「デジャブかよ……………。てめエらは、いつまでソコでコソコソしてんだよ……………」

音楽室の扉で、見え隠れしている三つの影に向かって言う……………。  
無論、平沢一味である……………。

「ほほ、バレてましたか。」「たりめエだ。」「み〜お、待たせ

たな!」「…遅いぞ!」

秋山は、一瞬だけホッ!としたような表情を見せていつも通りに戻った。だて、本題の練習だ。

「よし、練習を開始するぞ!とりあえず、音合わせだ。猫被り顧問がいたらいんだが……………」

気づいた点があったら、どんどん直していく。平沢は無論おれが指導する。

他は、自己調整。とにかく、練習あるのみだ。どんどん、取り組んでいくぞ!」

とにかく、練習。これ以外、上達する方法はない。とにかく、やるしかないのだ。

「なんか、クロ君がコーチみたい!」「ああ?」「よし、今日からクロは軽音部の監督な!」

監督なら顧問と言う役職が、ちゃんとあるだろう……………。ってか、あの猫被り顧問どこ行った?

「ンな事はどうでもいいだろ…。」「りっちゃん、軽音部のキャプ



テンはどうかしら？」『おお！』

『おお！』じゃねエよ……………今俺の役職はどうでもいいだろ。いや、今でなくてもどうでもいい。

「クロ君キャプテン！ビシ！ビシ！お願いします！！！」「だから、音あわせからだ……………」

一応団結したみたいだし、これが軽音部の雰囲気なんだと実感する黒一であった……………。

## #6 黒と初ライブ!? part 2 (後書き)

やばい……………親指が予想以上に痛い……………。

ギプス付けた親指も使いましたからねwwはい、馬鹿ですww  
ですが、執筆はしました!できれば、労ってほしいです!ww

感想・アドバイス、お待ちしております。

## #6 黒と初ライブ!? part3 (前書き)

今回は、少し背景や黒一的心情の変化にもこだわろうかと思っています。

何か、ソレやると本物の小説っぽくてカッコイイじゃないですか？

『思考錯誤・あたって砕けろ！精神』で、頑張りたいと思います！

#6 part3 スタートです。

## #6 黒と初ライブ!? part 3

～3時間後・音楽室～

「出だしのリフ、平沢ミスってんぞ……ってか、段々ミスが増えてるぞ！ちゃんとしろ！」

かれこれ、3時間。現在、お昼の12時のちょっと前。ライブまで後、3時間ほどしかない…。

が、音合わせすればする程ミスが多くなり（主にデコや天然）修正が追いつかなくなってしまった。

原因は単純明快……飽きた。疲れた。休みたい。……こんなトコだろう……。

俺も、やる気の無い奴に練習させても無駄というのは重々承知だし自身、疲れたら休憩する。

だがなア…今日は本番だ。いくら、身に入らないとはいえ気合で練習するしかないのだ。

さすがに本番間近だから休憩とらねエでも練習するだろう……。と、思っていたのだが……。

どうやら、コイツらの考える事は俺のキャパシティを超えているらしい……。

なんか、練習をボイコットし始めたのだ。それを怒る秋山。うっとりする琴吹。呆れる俺。カオス。

「はい！クロ君キャプテン！」 「キャプテンかどうかは別にして……はあ……休憩したいのか？」

「凄い！何で分かったの！？」 「はたから見りゃ、誰でも分かる……」。 田井中もか？」

すると、ドラムによたれかかっていた田井中が不意に起き上がり覚醒した。目もイキイキしている。

「まあ、3時間ぶつ通しだし仕方ねェな……。一時間だけ休憩だ。」 「「イエーイ！！！」」

デコと天然のまっしぐらコンビがハイタッチをして喜んでいる……。もう呆れるしかねェな……。

秋山は、不意を突かれたように驚いている。確かに、不意を突いたが……。同じく呆れていた……。

「ちょっと、黒一！本番近いんだから、休憩なんてしてる場合じ

「やあ……………」 「同感だ…。」

黒一も秋山と同じ意見だ。だが、黒一は平沢や田井中の性質を理解した上での考えである。

あんまり、アイツらを自由にし過ぎたら歯止が利かねえからな…。その辺の注意は抜かりねえ…。

「じゃあ、何で……………」 「アイツらの考える事は俺らのキャパシティー超えてるからな…。」

「言いたい事は分かるけど…つまり、どういう事？」 「このまま練習しても意味ねえって事だ。」

そう。今のまま練習を続けても意味が無い。それに、現在12…00。ランチタイムである。

腹が減っては何とやらである……………。特に、デコと天然のまっしぐらコンビに関しては……………。

「まあ、1時間くらいガス抜きしねえとな…。本番に響いたらそれこそマズいからな……………」

「はあ……本番まで後3時間しかないのに悠長過ぎるよ…。」  
「まあ、そう言うな……………」

グウウウ……………。「あ！／＼／＼／＼／」……………今は、聞か  
なかった事にしてやるから行け。」

すると、サッ！と秋山は立ち上がりドアまで来たところで静止して  
回れ右をして俺に言った。

「ぜ、絶対に言うなよ！？特に、律とかには絶対！絶対の、絶対だ  
からな！？」「るせエ……………」

「分かったから、とつとと行け。俺は言わねェし、寝たら忘れる。」  
「そ、そうか。良かった…。」

コレは、自然現象であり小腸が空になったら起こるのだが……………ま  
あ、相当恥しいよな……………」

特に、年頃の女子……………いや、秋山に関してはホント特にだ。だか  
ら、少し気を利かせる…。

「…じゃあ、行ってくる／＼／＼／＼／＼」 「あ、待て。気を利かせた札にデコと天然を見張っとけ。」

「いいけど、黒一はどうするの？」 「寝る。」 「いや…昼は？」 「朝食った。」 「ソレ朝食じゃん！」

俺は、朝に貰った『やきそばバーガー』で腹は満たされている。ので、睡眠を貪ることにする。

睡眠を取るために俺は、ソファ―に横になる……。眠い……………zzz……………。

「…………zzz…ワイワイ！ガヤガヤ！」 「…………zzz…ワー！ワー！…るせエ……………」

さすが、学園祭……………。俺も、寝ずに祭りを楽しめとでも言いたいのだろうか……………。

「…………俺も、行くか…。とりあえず、あの馬ア鹿使って、昼はなんとかするか……………」

馬ア鹿とは、無論水口の事である。アイツは、単純明快な頭脳の持ち主である。



この場合、馬鹿が妥当であろう。黒一曰く、原生動物並みの単純さらしい。馬鹿以前のレベルだ。

のっそり、ソファアールから立ち上がり恨めしそうに窓から学祭の風景を除いてみる…………。

ドタバタしているが、笑い声が絶えない。やはり、皆楽しんでいるのだ。よく分かる。

「俺達も、ライブを楽しめるといいな…………。できれば、観客の人達と共に…………。」

言ってて恥しくなってきた。ので、PRSを少しだけ弄った後に黒一は学祭の熱気に包まれていった。

（無駄に騒がしい廊下）

はあ…………。学祭とは、こんなにも騒がしいモノだったのか…………。いや、あまりにも騒が過ぎる。

しかも、騒がしい音源が一人の声色でしか聞こえない…………。この下衆ボイスの正体は…………！？

言うまでもなく、ゴミ口君です。馬鹿なの？俺はアイツが、天に召される日を心待ちにしている…。

「どうも、1ー1の食販店長です！桜高名物、『焼きそバーガー』は1ー1限定だよ！」

馬鹿orアホor気違いだろ……。ってか、店長とかアホな事よく恥らえずに言えるな……………。

「おい、ゴミ口。その口少しっつか全力で閉じろ。1ー1全体に多大な迷惑及び侮辱となる。」

「おう、黒一君！って……………なんじゃとっ！わしゃア、のう1組のために頑張ったのに！」

広島弁……いや、途中でただのクソ爺に口調が変わった。本当に、クソ野郎だな……………。

「…チイツ！…頑張るのは一向に構わんが、もう少しまともにやれ…。少しは休憩しろ。」

ここで、本来の目的を果たすための罠を仕掛ける。確実に食いつくだろうな……………。

まあ、食いついて来たら適当に煽っておいてアイツの機嫌をそこ上げて昼食でも何でも奢らせる。

「マジか!……よし!休憩もするか!黒一が言ったことだし!な、黒一!」「ああ…そうだ。」

呆気なく引っ掛かってくれたな……ゴミ口君。こんなんで、将来大丈夫だろうか……?

まあ、コイツの将来がどうなろうと関係ないのだが…。すると、前方から警察………?

いや、あのインテリ度をアップさせるための赤ぶち眼鏡。そして、ショートヘア………。

「あら、練習はどうしたの黒一?」「デコと天然にガス抜きが必要と判断されただけの事だ…。」

あんまり軽音部と醜態をさらけ出して馬鹿にされたくないの少し捻って事情を説明してみる…。

「ああ、唯なら絶対必要ね。」「お、和ちゃん!なになに、コスプレでもしてるの?」「(アホ…)

まず、何故……いや、愚問か……。長年、平沢のセカンドマザーをしてきたみたいだしな…。

そして、ゴミ口……。この格好を見て、コスプレと思うなんて全力でアホだな……。

そして、俺らは周りから注目されてたらしい…。相当の仕打ちだ…。真鍋も頬を紅く染めている。

「ば、馬鹿！／＼／＼見たら、分かるでしょ。生徒会は、学園祭を管理するのも仕事の内なのよ。

それより、慶。皆、あなたの事を探してたわよ！早く、教室に戻りなさい！ほら、早く！」

どうやら、自分の仕事もほったらかしてこの騒音超悪質ボイスを発していたらしい……。

おい…ちょっとまってや…。コレって、ゴミ口が罠から逃げられたことになるではないか。……。

「すまんっ！黒一！ちよっち、野暮用でお前とのランチタイムが……じゃ、またな！……。」

野暮用……か。相当、ムカつく……。せめて、普通に食販の当番だと言えや……。

「ソノヤボヨウデトワニネムツテロ……………」 「んゝ、何か言ったかゝ？」 「いっぺん死んどけ。」

それと…………俺の計画を阻止しやがった、インテリ伊達眼鏡に多少の憤りを覚える……………」

「はア…………。お前は、タイミングってモンを知らねエのかよ……………」 「どのタイミングよ……………」

「とりあえず、格好についての感想でも言っておこう。ゴミ口の意見は、強ち間違っていない。」

弱者が負けた後に言う台詞……………いわゆる、負け犬の遠吠え・捨て台詞と呼ばれているモノだ。

「どうしたの、黒一？何か、機嫌悪いみたいだけど……………」 「自分の、胸に問え…原因は、お前だ。」

なにやら、考え込む真鍋……………。そして、インテリ伊達眼鏡を中指で上げた。閃いたようだ……………」

「もしかして、慶を帰らせた事に問題があったとか？」 「ご名答、真鍋クン。さすが、眼鏡。」

さすがは、インテリ度up用伊達眼鏡を装着しているだけのことはあるようだった……………。

「じゃあ、ゴミ口がやるはずの役を代わりにしてくれるかね？」 「役って、なによ？」

「学園祭の、昼食代及びその他の代金支払い。」 「そんな事、誰がやるのよ…。」 「ゴミ口 慶。」

コイツがいなけりゃ、何事もうまくいったんだがなア……………。パシリが消えちまった以上仕方ない。

「そういう事だ。頼むぞ。」 「やらないわよ！」 「生徒会でなんとかしろ。」 「無茶言わないの。」

無理だと分かっているても若干、ムカつくので歯向かってみたくなっただけの話である……………。

ため息をついて、真鍋と別れて一人この騒がしい桜高を彷徨うこと

に……………。

く桜高の中庭にて……

「おい、黒一。」「下原か……」「今から、昼メシ行くけど一緒に行かね？」「ああ、行く。」

木が風で、わさわさと音を立てていた……。そよ風が、心地いい……。少し、気分が良くなってきた。

すると、二人の見覚えのある先輩方がこっちに向かって来た。どうやら、二年生のようなだった。

「あ、河岡先輩に柳川先輩！」「よ、下原！」「あら、下原君。」  
「ああ……あの時の先輩か……」

そう。遡る事、数ヶ月前。バイトを手伝ってもらったお礼に弓道の大会に出場したのだ……………。

その時、知り合ったのが河岡先輩と柳川先輩だ。右から、主将と副将だ。腕は良かったと思う。

「黒一君だったっけ？久しぶりだね。」「久しぶり、黒一君。」「お久しぶりです。」

「まあ、立ち話もなんだし皆今から昼食だろう？どこか、腰をかけて話そうか。」「そうね。」

とまあ、半強引に連れてかれた。しかし、俺も何かしらあの先輩方とは話してみたかったし…………。

各自、それぞれ好きなものを買ってきて中庭のベンチで落ち合うことにした。俺は、たこ焼きを購入。

「ねえ、黒一君は弓道暦長いんでしょ？」「6年ですが…まだまだ、未熟ですね。」「そう？」

元気で、とてもフレンドリーな河岡先輩に物腰がよく、とても優しいような柳川先輩…………。

軽音部には先輩いない。その分、良く言えばのびのびと、悪く言えばダラダラやれている。

弓道部もとても良さそうなクラブだ…。一人で道場に通うより、ずっと楽しそうだし面白そうだ。

「なあ、黒一君。弓道部には興味ない？」「え、そりやありますけど…。掛け持ちはちょっと…。」



なんか、とある猫被り教師と同じ事を口にしたような気がするのは俺だけだろうか……………？

「黒一君ってさ、ほら要領いいでしょ？好きな時だけ来てもいいから入部してみない？」

自主練はしてるんでしょ？入部したら、大会にもまた出てみない？」

来れる日なら俺は勿論行くであろう……………。そう考えると、悪い話じゃない。むしろ、いい話だ。

だが、今日は本番であり何かしらの時間もう少し欲しい…。最低でも、ライブ後になるであろう。

「そういう事なら、是非入部させてください。学園祭が終わったら入部届けを出します。」

その代わりと言っては何ですが、俺らの初ライブに来ていただけないませんか？」

「おっと、それは愚問だな。俺達は、元々見に行くつもりだったんだぜ！」「下原君からね。」

ちらっと、下原を見ると少し微笑んでくれた。さすがは、下原。その辺は、抜かっていたいなかった。

好条件で入りたいクラブとの両立。更には、俺達の初ライブに来てくれるという……………。

まさしく、一石二鳥ではないか。どうやら最近、俺はついているようだ。矢を貰った件然りである。

しばらく、楽しい時を過ごした。葉も色づき始めた、この季節。何だかとても、心地いい…。

そして、楽しい時はすぐ終わってしまうようで…。もう、5分前まで迫っていた。急がねば。

「じゃあ、俺はこのへんで失礼します。」「頑張れよ、黒一！」「楽しみにしてるからな〜！」

弓道部に入ったら、俺の先輩が出来るわけで…。そういう繋がりも少し嬉しく思う……………。

このままの気持ちでいけば必ずライブが成功するような気がしたので忘れないうちに行こうと思った。

黒一は、自信・希望に満ちた表情で音楽室まで走った。階段を上っていく時に感じた事があった。

この一段一段、着実に上っている様が現在の黒一の人生のように思えたのであった……………。

〈音楽室〉

「すまん。少し、遅れた。」「クロ、遅いぞー！私達も練習してたんだぜ！」「そうだよ、クロ君！」

見た感じ結構、真面目に取り組んでいたように見える。いつものティータイムの顔ではない。

高揚感が溢れている。俺もだ。ライブが近い分、精神的に気分が高まってきているのだろうか。

いや、それともコイツらの音楽に対する本当の気持ちは実はこれほどのモノだったのだろうか。

どちらでもいい。今、この練習している瞬間でさえも楽しめているのならどちらでも……………。

「ねえ、黒一。何か、いい事でもあったのか？」「ああ？どうしたんだよ、急に……………」

「顔が微笑んでるぞ。」「…ッ!……………何でもねエよ。高揚感とでも捕らえておけ。」「そっか。」

多分、勘のいい秋山や琴吹には分かるのかもしれない。恥しいので、シフトチェンジするが……………。

「練習、始めるぞ。音合わせ、終わったら機材も運ばなきゃなんねエからな。とつとと、始めるぞ。」

ライブを楽しむというのは、その過程プロセスから全ての事をさすのかもしれない。そう、思う。

ライブの前で既に、こんなに楽しめている。ライブ後も、思い出として残る。こういう事であろう。

しかし、本番しくじったら意味がねエ。感傷的になってる暇もないので、本当に練習を開始する。

## #6 黒と初ライブ!? part 3 (後書き)

いかがだったでしょうか？主に、後半辺りに注目してほしいですね。  
ソレっぽくしてみたのですが所詮てみたのは素人ですので不安です  
……。

それと、黒一は弓道部に入部します。例によって、話の幅が広がる  
からww

でも、軽音部が毎日あるので土日など空いた時間に通う設定です。

後輩もいいですが、先輩との繋がりも大切だと思うし僕は好きですね。

梓が後輩との繋がりなら、先輩との繋がりを書くのもアリかなと……。

でもまあ、モブキャラなので頻度はあまり多くでません。

感想・アドバイス、待ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1414y/>

---

けいおん！ ～黒の奏でる旋律～

2011年11月26日23時47分発行